

課題を発見し、主体的に学ぶ児童生徒の育成

～児童生徒の「振り返り」が次の学びにつながる授業を目指して～

令和5年度 研究紀要 第44集



中学部1年生 生活単元学習
「もっと知りたい、横手の〇〇」



小学部3年生 生活単元学習
「にこにこダンスタイム
～もったいないばあさん音頭～」



高等部2年生 家庭科2グループ
「元気なからだをつくる食事」

秋田県立横手支援学校

目次

はじめに

校長 阿部 純一

第一部 全体研究

1

第二部 各学部の実践

I 小学部の実践

8

II 中学部の実践

19

III 高等部の実践

29

参考資料

- ・資料1-1 「学習のアンケート(中学部)」まとめ
- ・資料1-2 「学習のアンケート(高等部)」まとめ
- ・資料2 職員アンケート集計結果

あとがき

教頭 高橋 和恵

研究に携わった職員

本校では、卒業後に地域で働き、生活をする児童生徒が、現在そして将来の生活をより豊かにするために、地域と一緒に学習する場を積極的に設定しています。地域を学習の場とし、地域資源を活用し、地域と協働して学習を展開することにより、着実に自立と社会参加していく力を獲得していくと考えます。また、地域住民の障害理解が進み、地域の一員として充実した生活に結び付くと考えています。児童生徒が校内と同じように主役となって活躍する舞台（学び場）が近隣の横手地区であるという意味から、本校では「横手が舞台」をキャッチフレーズとして掲げ、学習活動を展開しています。

昨年度の全体研究では、小・中学部は生活単元学習、高等部は職業科において地域資源を活用した「横手が舞台」の学習に取り組みました。そこで学んだことや感じたことを「伝える」という活動を通して、各学年・学部段階で目指す資質・能力に迫ることができました。しかし、授業づくりにおいては、「めあて」に対応した「まとめ」の設定、学習を通して児童生徒が何を学んだかを実感する「振り返り」の時間の学習内容、指導方法等などに課題が挙げられました。

今年度は、研究主題を新たに「課題を発見し、主体的に学ぶ児童生徒の育成～児童生徒の『振り返り』が次の学びにつながる授業を目指して～」と掲げました。教師が振り返りの時間の確保、振り返りの視点提示、振り返りの仕方の工夫を行うことで、児童生徒の「○○がしたい」「○○を知りたい」「○○を学びたい」等、主体的な学びが見られる授業や単元目標（育てたい資質・能力）の達成に迫るICTを有効に活用した授業づくりを目指しました。本校の授業づくりの基本である「横手のスタンダード」の共通理解から始まり、昨年度からの課題である「振り返り」の時間を確保するための目標設定と授業内容の精選などにも取り組みました。

また、今年度から授業改善コーディネーターを3名に増員し、学部授業研究会、全校授業研究会の指導助言者として指名し、校内で授業づくりを切磋琢磨できる研究体制をつくりました。さらに、ICT活用推進委員会と連携して、授業づくりの基礎基本を押さえた上で、活用意図を明確にしたICTの授業活用に努めました。児童生徒のICTへの高い興味・関心を生かして、学ぶことへの意欲と自己の学びの実感を高めることにより、より主体的に学びに向かう児童生徒を育成することができると考え研究を進めて参りました。

しかしながら、掲げた研究主題にどれだけ迫ることができたかについては十分とは言えず、反省点もありますので、本研究紀要を御高覧いただき、忌憚のない御意見・御指導をいただければ幸いです。

最後に、皆様からいただきました御提言等を今後の授業づくりに生かし、職員一丸となって研鑽に励みますこととお誓いして、発刊の御挨拶といたします。

〈第一部〉

全体研究

令和5年度 研究主題

課題を発見し、主体的に学ぶ児童生徒の育成 ～児童生徒の「振り返り」が次の学びにつながる授業を目指して～

1 研究主題の設定理由

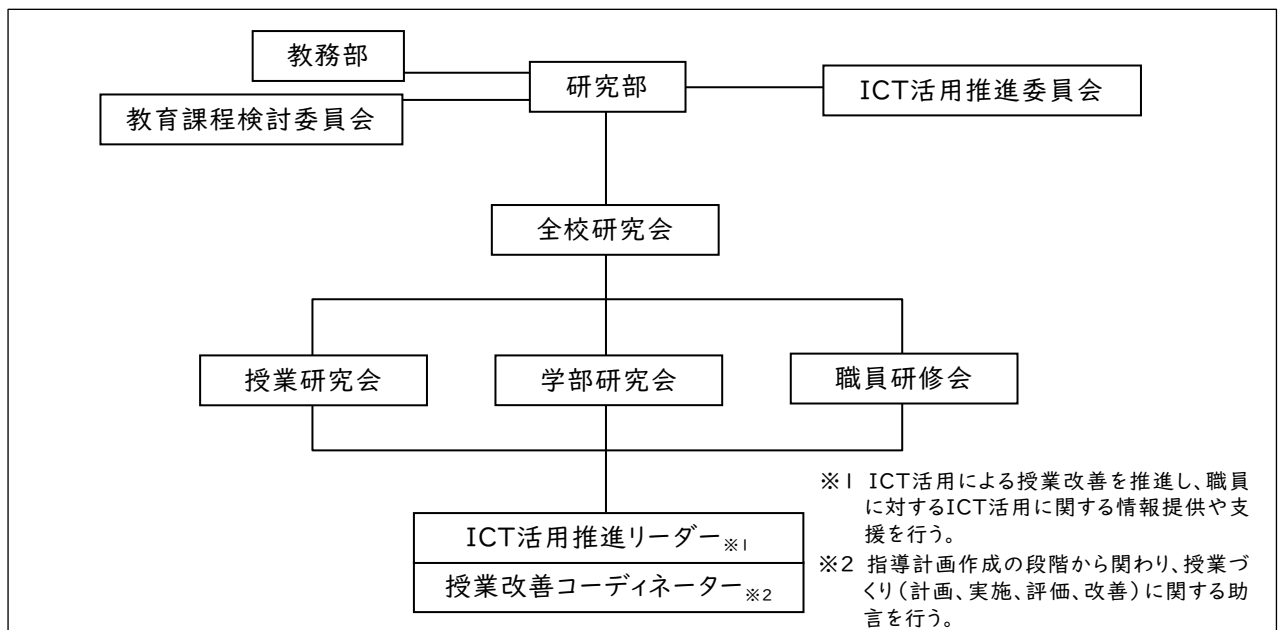
本校では、昨年度の研究で「単元を見通す」工夫、「学習の意味や意義を理解する」工夫、「ねらい、めあて、まとめ、振り返りの在り方」の工夫をした授業づくりに全校研究で取り組んできた。この研究により、「学びを実感し、主体的に学ぶことができる授業」を行うために有効だった教師の手立てや支援の工夫、ICTの効果的な活用方法を探り、児童生徒の変容が見られた。しかし、授業づくりにおいては、児童生徒がより主体的に学ぶためには「児童生徒の思考を大切にしたい授業づくり」が必要であることが明らかになった。児童生徒の思考を促す教師の発問の意図の明確化や児童生徒に合った言葉の選択、児童生徒の言葉の意味理解の促進など、児童生徒が言葉を知り活用する、表現する力を育てていく工夫が課題として挙げられた。また、年度末に行った職員へのアンケートから、「児童生徒に育ってほしいこと、伸びてほしいこと」として、振り返りを基に「次は〇〇したい」という思いをもつ（小学部）、振り返りやまとめを次時に生かす（中学部）、振り返りを次の目標（めあて）につなげる（高等部）等、振り返りに関する内容が多く挙げられた。さらに、振り返りが「楽しかった」「分かった」など本時の感想発表になってしまうことがあるという声も多く聞かれた。

そこで、今年度は、過年度の研究成果を反映させながら、横手のスタンダードを活用した授業づくりの基礎・基本を押さえた上で、授業の「振り返り」に焦点を当て、振り返りの時間の確保や振り返りの仕方を工夫することで、自ら課題を発見し、主体的に学びに向かう児童生徒を育成することができるのではないかと考えた。

2 研究仮説

授業の振り返りの時間を確保し、振り返りの仕方を工夫することで、児童生徒が自ら学びたいことややりたいことを発見し、主体的に学ぼうとする力を育てることができるであろう。

3 研究組織



4 研究の内容と方法

今年度は、1単位時間または単元(題材)の「振り返り」の仕方に焦点を当て、小学部と中学部は生活単元学習、高等部は家庭科の学習の中で検証を行う。研究期間は1年とする。児童生徒の主体的な学びを促す「振り返り」の仕方について、全校体制で研修をする。

具体的な研究方法は表1のとおりとする。

表1 研究の内容と方法

研究の内容	研究の方法
○各学部段階での「課題を発見し、主体的に学ぶ児童生徒の姿」の具体化と共通理解	・全校研究会や学部研究会で「目指す姿」を明確にするためのワークショップの実施
○「振り返り」の視点の整理(学部研究会)	・各学部段階での「振り返り」の視点の整理
○整理した「振り返り」の仕方を取り入れた授業実践と「振り返り」の仕方の検証	・ICT活用推進リーダーと各学部授業改善コーディネーターを活用した単元検討会、指導案検討会 ・全校授業研究会(各学部1授業)、学部授業研究会(全学年・学級)の実施
○教職員の「振り返り」の工夫の共通理解	・授業実践に関する意見交換(学部研究会) ・研究部報、研究紀要の発行
○児童生徒の主体性を目指した日々の授業改善	・授業づくりに関する研修会の実施 ・中学部と高等部生徒対象の「学習に関するアンケート」の実施(年2回) ・職員対象の「日々の授業づくりや指導に関するアンケート」の実施(年2回) ・他学部・他校種授業参観推奨、研修報告の共有

5 研究計画

実施時期	研究会等	内容
4月	全校研究会①	・全教職員での研究主題、方向性の確認 ・各学部における「目指す姿」の協議
5月	学部研究会①	・「横手のスタンダード」の確認 ・全校研究主題を基にした学部における方向性の確認 ・全校授業研究会、学部授業研究会の授業者等の選定
6月	指導主事計画訪問	・研究対象授業の提示
7月	学習のアンケート① 職員アンケート①	・生徒による教職員の評価 ※中学部、高等部生徒へ実施 ・日々の授業への取組の振り返り
8月	単元検討会 ※各学年、学習グループで実施	・単元構成や授業内容の協議 ・ICT活用の助言(ICT活用推進リーダー)
	学部研究会② 全校研究会②	・各学部における進捗状況の確認 ・各学部の取組の共通理解と「振り返り」の情報提示
	全校研修会	・授業づくりについて 「授業のまとめや振り返りから展開する授業づくり」 講師 教頭 稲川一男

9月	学部授業研究会	・小学部5年生 生活単元学習 授業提示、授業研究会の実施 ・高等部3年生 家庭科 授業提示、授業研究会の実施 ・小学部1年生 生活単元学習 授業提示、授業研究会の実施 ・中学部2年生 生活単元学習 授業提示、授業研究会の実施
	学部研究会③	・「振り返り」の視点や工夫の整理と共通理解
	研究部報No.1の発行	・指導主事計画訪問の指導助言等
10月	学部授業研究会	・小学部2年生 生活単元学習 授業提示、授業研究会の実施
	全校授業研究会①	・高等部2年生 家庭科2グループ 授業提示、授業研究会の実施
11月	全校授業研究会②	・小学部3年生 生活単元学習 授業提示、授業研究会の実施
	全校授業研究会③	・中学部1年生 生活単元学習 授業提示、授業研究会の実施
	学部授業研究会	・小学部4年生 生活単元学習 授業提示、授業研究会の実施 ・小学部6年生 生活単元学習 授業提示、授業研究会の実施 ・中学部3年生 生活単元学習 授業提示、授業研究会の実施
	学部研究会④	・「振り返り」の取組状況と児童生徒の変容の確認
	研究部報No.2の発行	・第2回全校研究会の共有、「振り返り」についての情報提供
	研究部報No.3の発行	・第1回全校授業研究会(高等部)の紹介
12月	学部授業研究会	・高等部1年生 家庭科 授業提示、授業研究会の実施
	学習のアンケート② 職員アンケート②	・生徒による授業に対する評価 ※中学部、高等部生徒へ実施 ・日々の授業への取組の振り返り
	研究部報No.4の発行	・第2回全校授業研究会(小学部)の紹介
	学部研究会⑤	・学部研究のまとめ、成果と課題の整理
1月	研究部報No.5の発行	・第3回全校授業研究会(中学部)の紹介
	研究部報No.6の発行	・小学部学部授業研究会の紹介
	全校研究会③	・今年度の研究成果と課題の共通理解 ・次年度の研究の方向性の周知
2月	研究部報No.7の発行	・中学部学部授業研究会、高等部学部授業研究会の紹介

6 研究の実際

(1) 「課題を発見し、主体的に学ぶ児童生徒の姿」の具体化と共通理解

第1回全校研究会で各学年に分かれ、「現在の児童生徒の様子」と「教師が思う児童生徒の『主体的な姿』」「目指す児童生徒の姿」について意見交換するワークショップを行った。小グループで意見を出し合うことで、より児童生徒の実態に応じた目指す姿を具体的に出すことができた。さらに、学部研究会で各学部の目指す「課題を発見し、主体的に学ぶ姿」の捉えを確認し、学部内で共有した。

第2回全校研究会では、各学部の「課題を発見し、主体的に学ぶ姿」の捉え(図1)を提示した。学部と全校のつながりが明確になり、全職員で共通理解することができた。

「課題を発見し、主体的に学ぶ姿」		
小学部	中学部	高等部
<ul style="list-style-type: none"> ●めあてを意識して自分から学習に向かい、自分なりにめあてを達成しようとする姿 ●学習を通して、できたこと、がんばったこと、もっとやってみたいことをことばや身振り、カード等で表現している姿 	<ul style="list-style-type: none"> ●学習のゴールが分かり、友達と共に学びを積み重ねながら、次の学びや自らの生活につなげようとする姿 	<ul style="list-style-type: none"> ●学習を自分のこととして捉え、自分の生活と関連付けて考える姿 ●課題に対して自分の経験や友達の考えをもとに解決していこうとする姿 ●自分を理解する姿

図1 各学部における「課題を発見し、主体的に学ぶ姿」

(2) 「振り返り」の視点の整理

全校研究会の中で、児童生徒が何を、どのように学び、何ができるようになったか等、自分自身の学びの過程や変容を自覚できる場面が「振り返り」であることを確認した。その上で学部研究会において各学部段階における「振り返り」の視点を整理した。

「振り返り」を意識した授業展開を構成することで、教師が「振り返り」の時間を意識して確保できるようになり、「振り返り」が児童生徒の学習活動に定着した。また、「振り返り」の視点を整理することで、本時のめあてに対してどの「振り返り」の視点が児童生徒の学びの定着につながるか、次の学びにつながるかなど考えて提示するようになった。

しかし、本時の「めあて」に対する「まとめ」が「振り返り」と類似していたり、「振り返り」が次の学びにつながらなかつたりすることがあった。「めあて」「課題」「まとめ」「振り返り」の違いを確認し、本時の「めあて」「課題」に対する「まとめ」「振り返り」が適切であるかどうかを検証する必要があると考える。

(3) 整理した「振り返り」の仕方を取り入れた授業実践と「振り返り」の仕方の検証

ア ICT活用推進リーダーと各学部授業改善コーディネーターを活用した単元(題材)検討会、指導案検討会

学年部または学習グループで、単元で育成を目指す資質・能力(単元目標)や目標達成に迫るための単元構想とICTの活用を含めた手立てについて話し合い、単元の「指導計画」を作成した。作成した「指導計画」を基に、ICT活用推進リーダー、各学部の授業改善コーディネーター、学部主事、研究部員、授業者で単元全体について検討を行った。単元検討会は、学部授業研究会(9回)と全校授業研究会(3回)で提示する単元(題材)について、計12回行った。

育成を目指す資質・能力の三つの柱で設定された単元(題材)目標が、互いに関連し合って達成されるものであるか、小単元の構成や学習内容が、単元目標を達成するために適切に設定されているかなどについて検討した。また、児童生徒の学びの実感と主体的な学びを実現するためにICTを有効に活用しているか、またはICTの活用方法について、ICT活用推進リーダーから助言を受けた。単元(題材)検討の段階でICTの活用について具体的にアドバイスをもらうことで、これまでICTの活用に消極的だった職員が児童生徒の目標達成に迫るためにタブレット型端末のアプリを使って教材を作成するなど、ICTの有効さを実感し、活用してみようとする意識の変化が見られた。

単元検討会は夏季休業中に全て設定したが、ICT活用推進リーダーには全ての単元検討会に参加するため、日程の調整が難しかった。授業者がICTの活用に関して検討してもらいたいことや単元構成で悩んでいることなどを整理した上で事前に「指導計画」を配付するなど、効率的に単元検討会を実施できるようにしていきたいと感じた。

指導案検討会は、全校授業研究会(各学部1回、全3回)の提示授業について行った。目標とめあての整合性や児童生徒の目指す姿の実現につながる学習展開や手立てについて検討した。授業改善コーディネーターには、普段の授業の様子や児童生徒の様子から、より実態に応じた具体的なアドバイスをもらうことができ、学習指導案に有効な手立てとして取り入れることができた。

イ 全校授業研究会及び学部授業研究会の実施

全校授業研究会は各学部1授業(全3回)、学部授業研究会は全校授業研究会提示学年以外の全ての学年(全9回)で実施した。今年度は、学校内で授業の意見を出し合うことで、校内で伝え合い、語

図2 指導計画

り合える環境をつくり、話し合いが活性化されることをねらい、全校授業研究会の指導助言は校内職員が行い(表2)、学部授業研究会は各学部の授業改善コーディネーターを指導助言者とした。

表2 全校授業研究会一覧

実施日	学部・学年	指導の形態・単元(題材)名	指導助言
10/30	高等部 2年生2グループ	家庭科 「元気なからだをつくる食事」	授業改善コーディネーター 教諭 佐藤 恵
11/ 6	小学部3年生	生活単元学習 「にこにこダンスタイム」	教頭 稲川 一男
11/21	中学部1年生	生活単元学習 「もっと知りたい 横手の〇〇」	教諭(兼)教育専門監 菅原咲希子

校内の職員を指導助言者とすることで、単元検討会から提示授業に至るまで事前に授業や児童生徒の様子を見てもらい、児童生徒の実態に応じた手立てや教材の提示方法、振り返りの工夫など、具体的なアドバイスを受け、日常的に授業改善を行うことができた。次年度も校内で職員の授業力の向上を図るために、継続して取り組みたいと考える。

授業研究会では、タブレット型端末のアプリ「ロイロノート・スクール」を活用して協議を行った。従来の付箋紙を使った協議と同様に導入・展開・終末の児童生徒の姿と教師の手立てを色分けしたカードに書き込んでグループ化し、改善案を出し合った。初めはタブレット型端末の操作に慣れず入力に時間が掛かってしまうことがあったが、会を重ねるごとに操作に慣れ、活発に協議が行われるようになった。また手で必要な部分を拡大・縮小しながら話し合うことができ、焦点化して協議を進めることができた。

一方で、事前に入力する時間が取れず協議中に入力するため協議の時間が十分にもてない、自分のタブレットばかりに集中してグループでの協議がうまくもてないなどの反省点が上がった。事前に考えをまとめ入力する時間を確保すること、グループの協議ではモニターを活用することなど、改善をしていきたい。

(4) 教職員の「振り返り」の工夫の共通理解

ア 授業実践に関する意見交換(学部研究会)

今年度は学部研究会を年5回実施した。学部研究会の中で「振り返り」に関する共通実践事項を提示し、授業実践・授業改善に取り組んだ。

小学部では、「振り返り」の視点を明確にするために、振り返りの視点のポイントを教室掲示したり、振り返りの表現方法を広げるためにカード類や文例を準備したりした。

中学部では、昨年度から使用している「かまくらカード」の活用の仕方を、教師が事前に「振り返り」の視点を明記して提示する形に変更して実践した。

高等部では、全ての授業における「振り返り」の方法や工夫について整理し、「振り返り」の段階表を作成した。

各学部の具体的な取組や成果と課題については、「Ⅱ各学部の取組」に記載している。

イ 研究部報の発行

研究部報は、今年度7回発行した。指導主事計画訪問の指導助言や全校授業研究会・学部授業研究会の協議内容を紹介した。発行時期が遅くなってしまう、タイムリーな情報提供をすることが難しかった。授業づくりに関する情報や研究に関する内容を計画的に提供したい。

(5) 児童生徒の主体性を目指した日々の授業改善

ア 授業づくりに関する研修会の実施

授業づくりの基礎・基本を全校職員で共通理解するために、「横手のスタンダード」の内容について

5月に全職員で確認した。「横手のスタンダード」を改めて確認することで、全職員が共通理解し、日々の授業に生かすことができた。次年度は、4月中旬に「横手のスタンダード」を確認し、年間指導計画作成の参考になるようにしていきたい。

また、職員のアンケートから児童生徒の学びにつながる「振り返り」について研修をしたいという声が多く上がったことを受け、8月に「授業のまとめや振り返りから展開する授業づくり」というテーマで稲川一男教頭を講師として全校研修会を行った。職員からは「研究主題に沿った内容を講義していただき、すぐに実践に結び付けやすく参考になった」「実生活の中から課題意識をもたせることの大切さを確認できた」などの感想が寄せられ、その後の指導や授業改善に生かすことができた。次年度は研修内容を早い段階で検討し、全校研修会を夏季休業前半までに開催できるようにしたい。

イ 中学部・高等部生徒対象の「学習に関するアンケート」の実施 ※資料1参照

7月と12月に中学部と高等部の生徒を対象に「学習に関するアンケート」調査を行った。7月はプリントへの記入、12月はGoogle Forms(タブレット型端末の使用)での回答とし、教職員の授業の進め方と授業内容についてアンケート調査を行った。

中学部・高等部ともに、どの項目も肯定的な回答が80%以上あり、生徒たちにとって教職員の指導方法や授業内容は適切に行われていることが分かった。

生徒へのアンケートについては、生徒の意見を聞いたり、私たち教職員の指導についてどう思っているかを知らたりすることができる貴重な機会なので、質問内容や調査方法を検討しながら継続して取り組みたい。

ウ 職員対象の「日々の授業づくりや指導に関するアンケート」の実施 ※資料2参照

7月と12月に校内職員に対して「日々の授業づくりや指導に関するアンケート」調査を行った。

7月に比べて12月の方が、ほとんどの項目で肯定的な回答が多かった。「ややできなかった」「できなかった」の回答が多い項目については、次年度改善を目指す取組として取り上げていきたい。職員へのアンケートは、自身の指導を振り返ったり、見直したりするよい機会になるので継続して取り組みたい。

エ 他学部・他校種授業参観の推奨、研修報告の共有

他学部授業参観については時間の調整が難しく、参観する機会を設定することができなかった。次年度はじっくり授業を見合い、協議できる時間をもてるような工夫をしたい。

他校種(小・中学校)授業参観については、小・中学校の指導主事計画訪問に合わせて授業参観を積極的に行った。(表3)

表3 小・中学校授業参観の実施状況

期日	学校	学年	教科等	人数
9月21日	平鹿中学校	2年	数学	1名
10月17日	増田小学校	5年	特活	1名
		6年	特活	1名
10月25日	朝倉小学校	1年	国語	1名
11月2日	吉田小学校	1年	生活	1名
11月9日	旭小学校	4年	国語	1名

期日	学校	学年	教科等	人数
11月17日	十文字中学校	3年	国語	1名
11月24日	栄小学校	3年	体育	1名
12月1日	栄小学校	2年	算数	2名
12月5日	雄物川小学校	1年	算数	1名
		3年	算数	
12月14日	大森小学校	特支	生単	1名
合計				12名

授業参観後は研修報告書と指導案を全校回覧し、研修内容を共有した。今年度は授業参観のみの参加になってしまったが、次年度は研修を深める意味でも授業研究会に参加し、研修したことを報告する機会を設けたいと考える。

7 全校研究における成果と課題

(1) 成果

ア 児童生徒が課題を発見し、主体的に学びに向かうための授業づくりと児童生徒の変容

職員へのアンケートから、今年度は「振り返り」に焦点を当てて研究を進めたことで実践することが分かりやすく、取り組みやすいという回答が多く得られた。どの学部でも授業における「振り返り」の時間を量的に確保することから取り組んだことで、研究対象以外の授業でも「振り返り」の時間を確保するようになり、児童生徒が授業で「振り返り」をすることが定着した。また、「振り返り」の時間が定着したことで本時の学びを定着させる「振り返り」や次の学びにつなげるための「振り返り」の視点が整理され、児童生徒の実態に合わせた「振り返り」の仕方を工夫することにつながり、「振り返り」の質的向上につながった。

「振り返り」がうまく機能することで、児童が「次は〇〇してみたい」「次は〇〇に気を付ける」「〇〇ってどういうことだろう」など、次の学びへ期待感をもつ姿が見られるようになった。

イ ICTを活用した授業づくり

前年度の研究では、学習場面や活動、児童生徒の実態に応じて、ICTの活用が有効であるかどうかを見極めて活用し、児童生徒が学びやすい状況を整えた。今年度も単元検討会にICT活用推進リーダーが参加することで、ICT活用について職員に具体的なアドバイスをもらうことができた。そのことをきっかけに、他の授業場面でも児童生徒の学びに有効な手立てとしてICTを活用し、指導の効果を高めることにつながったと考える。

(2) 課題

ア 「振り返り」から展開する授業づくり

「振り返り」の時間を確保することで、時間配分が難しく「めあて」や「課題」を達成するための学習活動が曖昧になってしまったなど、授業の構成に関する課題が残った。本時で児童生徒が「何を学ぶか」、そのためにどのような学習活動を展開するか、「振り返り」で「何を学んだか」を明確にすることが必要であると考え。また、「めあて」と「課題」、「まとめ」と「振り返り」の違いを意識し、本時の学びには「めあて」「課題」のどのような提示が妥当なのか、「めあて」「課題」に対する「まとめ」と本時の学びの「振り返り」など、整理した授業づくりも考えていきたい。

さらに「振り返り」については、児童生徒の新たな疑問や興味を伝えるための言語能力の拡充など表現方法を増やしていくことも課題として挙げられる。教師が児童生徒の「振り返り」をどのように児童生徒に返して思考を広げていくかについても考えていく必要がある。

イ 本時の学びが見える板書の工夫

本時の「めあて」や「課題」、「まとめ」や「振り返り」が板書に提示されるものの、授業の展開が板書に反映されていないことがあった。板書から本時の学びが筋道立てて見えることが、児童生徒の次の学びにつながる「振り返り」につながると考える。また、学部または全校で「めあて」「課題」「まとめ」「振り返り」の提示を統一した板書を目指すことで、児童生徒がどの学習でも自ら考え、主体的に学びに向かう授業を展開するための一助になるのではないかと考える。

本時の「めあて」や「課題」の達成の過程が「まとめ」や「振り返り」へと一連の流れとして見える板書の工夫をしていきたい。

〈第二部〉

各学部の実践

I 小学部の実践

1 児童の実態

障害の特性や身体の状態は大きく異なるが、友達や教師と仲良く活動することのできる子どもたちである。意思表示においては、表情や発声、指差し、身振りで意思を伝えようとしたり、自分の話したいことや出来事を簡単な言葉で伝えたりするなど、実態は様々である。

過年度の研究から、めあてを学習活動のゴールとして意識し、授業で行われる振り返りでは、めあてに沿って話すようになってきたが、「～を頑張りました」や「～が楽しかったです」という発言がほとんどで、「どんなふうに」「なぜそう思ったか」など自分から具体的に話すことは少なく、次時への課題意識をもつことに至ってはいない。

2 研究の実際

(1) 学部研究の取組

ア 学部研究会①

小学部で目指す「課題を発見し、主体的に学ぶ姿」について意見を出し合い、整理した。

【小学部で目指す課題を発見し、主体的に学ぶ姿】

- ・めあてを意識して自分から学習に向かい、自分なりにめあてを達成しようとする姿。
- ・学習を通して、できたこと、頑張ったこと、もっとやってみたいことを言葉や身振り、カード等で表現しようとする姿。

イ 学部研究会②

生活単元学習における「振り返り」についてのアンケート結果の確認、小学部の研究の仮説、共通実践として取り組みたいことについて提案した。提案を受けて、振り返りの仕方や表現方法について学年部で検討した。

【研究の仮説】

振り返りの視点を明確にして、表現方法を工夫することで、学びを実感し、次の学びにつながる意欲を育むことができるだろう。

【共通実践事項】

(ア) 振り返りの視点を明確にするための手立て

○視点のポイント(図1)または(図2)を教室掲示する。

※授業内容や発達段階に応じて視点を選んだり絞ったりする。

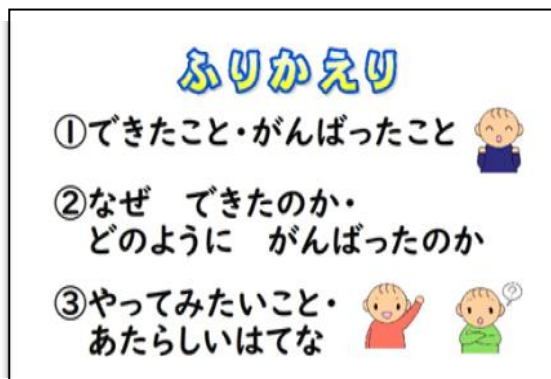


図1 振り返りの視点のポイント

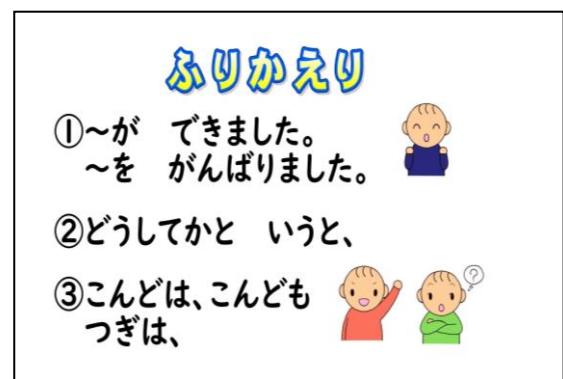
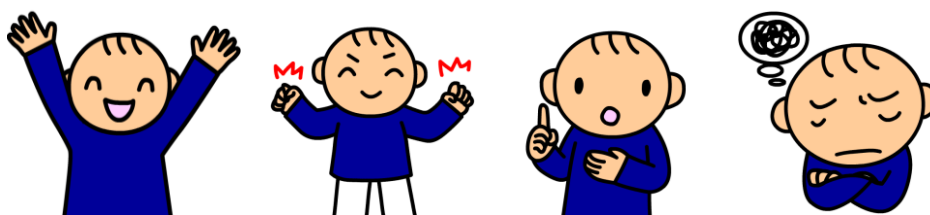


図2 視点に合わせた話し始めの言葉

(イ) 表現方法を広げるための手立て

○表現カードを準備する。



たのしかった

がんばった

またやりたい

むずかしい

図3 気持ちカードの例

○絵(写真)カードを準備する。

授業で使ったものを振り返りでも生かす。

○文例を示す。

教室に掲示したり、ラミネート加工した手引きを活用したりする。

ウ 学部研究会③

今まで行われた授業研究会の記録を配付し、成果と課題について各自が整理したり、今後、授業提示がある学年は、提示授業の打ち合わせや準備を行ったりした。

後日、全校授業研究会の学部研究経営説明で、前期での成果と課題から後期に向けて取り組んでいきたいこととして次の3点を挙げて、確認した。

- ・全体、個々のめあてを意識するための工夫(めあてのもたせ方、掲示、声掛け等)
- ・授業の途中で即時評価をし、学びの実感(振り返り)につなげる。
- ・学びをつなげるための、導入や振り返りでのICT(映像)の活用。

エ 学部研究会④

後期に行われた授業研究会の記録を配付した。児童の変容や共通実践についての成果と課題についてアンケートを実施した。

オ 学部研究会⑤

これまでの学年の取組における成果と課題を報告し、教師のどんな手立てが児童の主体的な姿につながったのか(有効だった手立て)について共有した。

12月のアンケートについて確認し、小学部の課題について話し合った。さらに、次年度の取組についてのアンケートを実施した。



(2) 授業づくりの実際

<小学部1年生「みんなでたのしもう ～ぐんぐんボウリング～」>

単元検討会の様子

単元の終わりに近く、児童一人一人が友達やゲストと楽しみながらボウリングをすることを第一に考えたいという授業者の思いを伝え、児童のめあてをどうするかについて、検討した。「応援する」とボウリングをする人たちみんなが楽しめるのではないかと、という案が出た。協議した結果、1年生の児童の実態に合った応援の方法を三つ程度児童に提示し、応援しながらボウリングをして楽しむことをめあてとすることになった。

単元の目標

- ・ボウリングに必要な道具を知り、作り方表を見て素材を自分で選んだり、飾り付けする場所を自分で決めたりして、制作活動をする。 知 技 思判表
- ・役割を分担して教師や友達と一緒に看板やメダルを作ったり、友達と声を掛け合って役割を果たしたりする。 思判表
- ・簡単なルールを守って、楽しみながら教師や友達とボウリングをする。 知 技 学 人

研究授業の実際

□本時の目標(本時 14/16)

- ・ゲストや友達を応援して、楽しみながらボウリングをする。 思判表 学 人

□主な活動

- ・会場づくりやボウリングに必要な道具を準備し、ボウリングをするときの一人一人の役割を確認する。
- ・掛け声、ポーズ、拍手で応援しながら、ゲストと一緒にボウリングをする。

□「目指す児童の姿」「課題に向かう姿」に導くための工夫と児童の姿

教師の工夫(振り返りの工夫)	児童の姿
<ul style="list-style-type: none"> ・児童の様子をモニターに映し、誰がどのようにしてゲストや友達を応援しているかについて一人ずつ映像を見ながら振り返る。 ・児童のめあてについて自分で振り返ることができるよう、<u>花丸カード</u>または<u>残念カード</u>を準備する。 ・<u>児童がめあてに選んだ内容に沿って</u>、ゲストから一人一人の児童の頑張りについて話してもらうようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分や友達が拍手や盛り上げるポーズ、声で応援する姿を映像で見ながら、誰がどんなふうに応援していたかについて言語化したり、教師の話の聞いたりした。 ・自分の姿を映像を見て、めあてにしたことができたかどうかについて、一人一人、カードを選択し振り返った。 ・ゲストから「応援してもらって元気が出たし、楽しかった」という感想を聞いて、笑顔になった。

単元の成果と課題(成果○、課題●)

- 単元の導入時や授業を進める際に画像や映像を活用することによって、児童がこれから学習することのイメージをより強くもったり、授業時の自発的な行動につながったりした。
- 児童が自分や友達の様子を映像を見て、めあてについてできたかどうかを振り返る学習活動は有効であった。また、友達が映像を見て他者評価することによって、言語化したり選択したりすることが難しい児童も頑張りや成果を実感できた。
- ゲストの感想の内容は、応援の意味や効果が押さえられていて、応援を価値付けるものでよかった。次時の導入でゲストの言葉を用いて応援することの意味を確認することで、児童は応援することへの意欲を高め、楽しんでボウリングをするというねらいに迫ることができた。
- 授業の終わりの振り返りの評価だけでなく、ボウリングをしている途中で即時評価をし、児童一人一人が本時のめあてを確認できるような支援をする。
- 本時までの学習の経過や学習を振り返るための結果(優勝者や得点)を見える化するなど、学びの積み重ねを児童がより実感するための支援をする。

<小学部2年生「ひまわりアートひろば ～あきのおみせやさんをひらこう～」>

単元検討会の様子

「ひまわりアートひろば」という単元では、季節の飾りを作ったり絵を描いたりする図画工作的な学習をしている。「たんけんしよう～あき～」という単元で見つけた木の実や落ち葉を使って、つくりたいものを作り、作った物でお店屋さんを開くというゴールを設定することで、楽しんで学習に取り組めたらという願いをもって単元を構成した。振り返りの仕方については、掲示している「振り返りのポイント」を使っていく。話し始めの言葉を使って、型に合わせながら使っていくようにしていきたい。言語表出が難しいRさんは、絵カードを使っていく予定である。

単元の目標

・木の実、落ち葉などから自分の表したいことを思い付き、形や色を楽しみながら店の品物や看板を作る。

知 技 思 判 表

・売ったり買ったりするときに必要な言葉や動きが分かり、相手の様子に合わせて対応する。

知 技 思 判 表

・できたことや覚えたことを生かして、自分からお店開きに取り組もうとする。

学 人

研究授業の実際

□本時の目標（本時 4/8）

・売るときに必要な言葉や動きが分かり、やりとりをする。

思 判 表

□主な活動

・お店屋さん役を試行し、自分のめあてをもつ。

・お店やさんを開く。めあてが達成されたか確かめる。

・本時の振り返りをする。

□「目指す児童の姿」「課題に向かう姿」に導くための工夫と児童の姿

教師の工夫（振り返りの工夫）	児童の姿
<ul style="list-style-type: none"> ・前時に考えた買い物に必要な言葉や動きを整理するために、「やりとりの流れ（短冊、吹き出し、絵カード）」を提示する。 ・自分の課題を見付けられるように、あいさつや品物を渡すこと、お金の受け取りができたか、みんなで○×チェックし、「やりとりの流れ」のつまずいたところをめあてにして顔写真を貼って示す。 ・個人のめあてを確認してから、再度一人ずつお店屋さん役を行い、みんなで即時評価をする。その後、振り返りをする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・黒板に掲示していた「やりとりの流れ」を手掛かりにしたので、自信をもって活動ができていた。 ・試行したことを基にして、うまくできなかったところや友達からの○×評価で自分のめあてを考えていた。 ・まとめとしての実演を通して、頑張ったことやできるようになったことを実感し、次の個人のめあてを考えていた。「振り返りのポイント」を見て、どうしてそう思ったかを自分なりに考えて話す児童もいた。

単元の成果と課題（成果○、課題●）

○材料から自分の作りたい物を考えて作り、その作った物でお店を開くことで、主体的な活動につながった。

○めあてをもたせるために、お店屋さんを試行したことで、自分の頑張りたいところやもっとよくしたいところを自分で考えたり意識したりすることができた。また、展開の最後に再度お店屋さんのやりとりを一人一人が発表したことで、めあての達成を実感し、振り返りで、次にこうしたいという思いをもつことができた。

●1時間の中で同じ活動が2度あるときは、1回やった後に、めあてについて確認したり、よかったところや改善したいところについて振り返ったりすると、2回目の時にレベルアップが図られたと思う。即時評価をする場や時を教師側が見通しをもって設定することが大切だと感じた。

<小学部3年生 「にこにこダンスタイム～もったいないばあさん音頭～」>

単元検討会の様子

単元のねらいを子どもたちに分かりやすく伝える方法や評価の仕方について協議を行った。「もったいない」というキーワードを子どもたちが理解できるようにするためには、絵本の中で特に身に付けてもらいたい部分をピックアップしたり、もったいない行動をしている実際の場面を言葉と写真や動画で提示したりするのがよいのではないかという意見が出た。また、他者評価によって発表会の様子を振り返られるように、見てもらいたいポイントを伝えたくて招待した相手に評価してもらう場面を設定することになった。

単元目標

- ・制作やダンスの振り付けのポイントが分かって、招待状や衣装を作ったり、踊ったりする。
- ・自身の生活の中にあるもったいない行動に気付く。
- ・絵本のせりふや振り返りを、言葉や身振りで表現する。
- ・学級の友達と一緒に招待状づくりやダンスの練習をしようとする。

	知	技
知	技	思
		判
		表
		学
		人

単元の概要

にこにこダンスタイムは、児童全員が好きなダンスの活動を通して、集団で活動することのよさやきまり、日常生活に必要な体の部位名や方向、動作などを学習する通年で行っている単元である。本単元では、絵本「もったいないばあさん」が基となっているダンス「もったいないばあさん音頭」を踊る。単元の終わりにはダンスの発表会を行い、それに向けて招待状や衣装の制作をしたり、ダンスの練習をしたりする。

研究授業の目標

- ・にこにこポイント(気を付けること)が分かって、招待状づくりをする。

知 技

「目指す児童の姿」「課題に向かう姿」に導くための工夫と児童の姿

教師の工夫(振り返りに関すること)	児童の姿
<ul style="list-style-type: none"> ・にこにこポイント(制作のポイント)が分かって招待状を作れるように、ポイントを示したカードを籠や机の上に貼る。また、振り返りではカードと同じ写真を使い、○×から選んで児童が評価できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・カードを見ながら道具の使い方などに気を付けて招待状を作っている様子が見られた。振り返りでは作った招待状を見ながら、○か×を選んでポイントを守ることができていたかを評価していた。
<ul style="list-style-type: none"> ・振り返りを言葉や身振りで表現できるように、「気持ちカード」を使用し、カードに「がんばりました」などの文字を書いておくことで教師と一緒に読めるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分でカードを選んで発表する様子が見られた。また、カードの文字を一緒に読むことで、声に出して振り返りをすることができた児童もいた。
<ul style="list-style-type: none"> ・本時の達成感や次時への期待感がもてるように、単元計画表に花丸シールともったいないばあさんの絵に体のパーツを貼る場面を終末に設定する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・単元計画表を見て学習の進捗を確認したり、もったいないばあさんの体のパーツを貼ることを楽しみにしたりする様子が見られた。

授業研究会での主な協議内容と改善案

- ・子どもたちが「にこにこポイント」を理解できているか。
→自分の役割やにこにこポイントが分かるように、役割表に顔写真を貼る場面を設定する。また、「にこにこになる」の意味が分かりやすいように招待状を送る相手の普通の顔と笑顔の写真を用意する。
- ・子どもたち同士で評価し合う場面があるとよい。
→にこにこポイントを守れていたかを、作った招待状を見ながら○×カードで評価し合う場面を設定する。

指導助言【教頭 稲川一男】

□「にこにこポイント」を子どもたちに意識させるために

教師が教えるべきところと教師が子どもに気付かせたいところがある。はさみの使い方や持ち方は教師が教えるべきところ。線の上をきれいに切りたい、白い部分を少なく切りたいなどは、子どもたちがはさみを使って初めて気が付くところ。そういうところを子どもに気付かせて、それが「にこにこポイントだね」という形で押さえていけるとよい。

□振り返りについて

○×だけでなく、実際の子どもの写真もカードに載っていて分かりやすかった。子どもたちが選びやすい工夫がされていた。また、「むずかしかった」「たのしかった」「またやりたい」と振り返りの選択肢が三つあった。教師が二つを選んでそこから子どもたちが選んでいたが、「またやりたい」を選んでいる子どももいて、次につながる振り返りの工夫をしていた。今回は一人ずつ振り返りをしている。他の子どもは一人が発表しているときにはずっと見ていたり、友達が選んで発表しているのを聞いたりする活動で、選んでいる時間はただ待っているだけだった。共同で1枚の招待状を作るので、「線の上を上手く切れていた」とか、「曲がらずに貼れていた」とか、友達同士の他者評価があるとよい。他者評価する機会を徐々に積み重ねていけば、人との関わりが増えてくるのではないかと考える。教壇に立ったら、教師は一人の役者。子どもの学習意欲を高めるためには、表情豊かに大げさなアクションをすることが必要。思いっきり泣きまねをする、大げさに笑うなどと、それが子どもたちの活動意欲につながっていく。

単元の成果と課題（○成果、●課題）

- 児童の実態に合った絵カードの手立てによって、制作の場面ではポイントが分かって活動することができ、振り返りでは身振りや言葉で発表できるようになった。
- 学習の履歴が分かる掲示物によって、児童が見通しや達成感をもって学習に取り組むことができた。
- 発表会という単元のゴールを明確にしたうえで、同じ活動内容や指示の出し方を繰り返し行うことで、児童が内容を理解して自分から活動できる場面が増えた。
- 「にこにこ」や「もったいない」というキーワードが理解できるように、表情が分かる写真を提示したり、毎時間絵本の読み聞かせをしたりした。しかし、日常生活の中のもったいない場面に気付くことができるようになるには、今後も場面を捉えて「もったいない」という意識付けを図っていく必要があると考える。
- 招待状を持って行って、招待相手の実際の反応を見る活動を取り入れることで、子どもたちの意欲につながるのではないかと考える。
- 次時のモチベーションにつながる振り返りにするために、「もったいない」「にこにこ」のキーワードを使いながら児童のよかったところを教師が示すことが大切だと感じた。



<小学部4年生「なかよしげきだん～5ひきのやぎのがらがらどん～」>

単元検討会の様子

人前でも自信をもって役割を果たそうとすることを主なねらいとしており、その手立てとして、劇の発表会を設定したいと考えている。昨年度までの劇遊びや発表を振り返り、児童たちが好きな絵本を選んで発表内容を決めたい。

振り返る際の動画の活用の仕方について、個々のめあてに沿った振り返りができればよい。言葉で上手く表現できない児童について、カードの選択やアプリの活用等どのように振り返りをしていくか検討が必要。

単元の目標

- ・活動内容や自分の役割が分かり、劇のせりふを覚えたり、発表会に必要なものを作ったりする。 知 技
- ・自分の思いを表現したり、友達の考えを受け入れたりしながら、発表会の練習や本番を行う。 思 判 表
- ・自分や友達のよさに気付いたり、人前で自信をもって自分の役割を果たそうとしたりする。 学 人

研究授業の実際

□本時の目標(本時 13/25)

- ・気を付ける箇所が分かり、自分の出番でせりふを言ったり、動作したりする。 知 技 思 判 表

□主な活動

- ・劇の準備、練習をする。
- ・劇の練習動画を見て振り返る。

□「目指す児童の姿」「課題に向かう姿」に導くための工夫と児童の姿

教師の工夫(振り返りの工夫)	児童の姿
<ul style="list-style-type: none"> ・気を付けることを思い出して練習できるよう、前時の振り返りシートを黒板に提示する。 ・劇の途中で即時評価をする。評価が視覚的に伝わるように、評価カード(「グッドカード」と「がんばれカード」)を児童の様子に合わせて提示する。 ・<u>振り返りの場面で、個々の「がんばりポイント」を確認してから一人ずつ動画を流す。</u> ・次の練習に生かせるように、頑張りたいことを文字や絵カードで示し、「がんばりシール」を貼る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・個々の振り返りシートを見て、自分で頑張る点を思い出して劇の練習に臨むことができた。 ・「グッドカード」を見るとうれしそうな表情が見られ、自信をもって演技ができた。見ている児童たちからも「グー」と称賛する声上がるなど楽しみながら劇練習を行った。 ・頑張った練習した点について注目して動画を見ることができた。また、よい点や改善点について気付いたことを発言する様子が見られた。 ・自分や友達のよい点を認めながら、次回、もっと頑張りたいところを相談して決めることができた。児童から「次は、お客さんの方を見てせりふを言った方がよい」という意見が出された。

単元の成果と課題(成果○、課題●)

- 劇の練習の際、前時の振り返りを生かし、本時の個々のめあてを「がんばりポイント」として提示したことで、児童が自分の頑張るところが分かって劇練習を行うことができた。発表本番では、小学部全員の前で、自信をもって自分から動いたり、大きな声でせりふを言ったりして自分の役割を果たしながら発表できた。
- 児童たちが「がらがらどん」の役、T3が「トルル」役を行う設定にしたことで、児童とT3とのやりとりを通して、教師の意見を受け入れ、「もっと頑張ろう」という意欲につながった。
- 観客は、顔写真ではなく、T2が座って観客となり、演技が終わった後、即時評価する場面があるとよかった。その場で褒められたり、教えてもらったりすることが児童にとって分かりやすく、主体的に学ぶ姿につながる。
- 振り返りの場面で、T1の話が多くなってしまった。言葉でのやりとりだけでなく、動画を見た後、改善点について、もう一度演技する場面があるとよかった。

<小学部5年生「わくわくたんけんたい～やくおうどうへいこう②～」>

単元検討会の様子

「やくおうどうへいこう①」から続いた単元であるため、1回目の内容を確認するとともに、2回目の今回はどのような違いがあるのか、1回目からステップアップしてどのような目標を立てるのかについて話し合った。2回目のため、教師が最初からバスの乗り方やマナーを提示するのではなく、児童が自分たちの経験から思い出して学習に取り組めるようにしたいと話が出された。今回は、「お金を準備して支払う」「降車時に忘れ物を確認する」の2点に着目して目標を立てることにした。

単元の目標

- ・友達と商品を探して選んだり、代金を正しく支払ったりして買い物をすることができる。 知 技
- ・乗車後、余裕をもってお金を準備して支払ったり、降車時に忘れ物を確認したりして落ち着いて路線バスを利用することができる。 知 技 思判表
- ・買い物や路線バス利用の際の約束やマナーについて、これまでの経験を思い出して発表したり、それらを守って安全に公共施設や交通機関を利用しようとする。 思判表
- ・校外学習への意欲をもち、友達と声を掛け合って歩いたり、グループで活動するなど協力しながら買い物をしたりする。 学 人

研究授業の実際

□本時の目標(本時 5/10)

- ・バス利用の練習を通して、乗車後に余裕をもって料金を準備したり、降車時に忘れ物を確認したりする。

知 技

- ・これまでの経験を思い出しながら、バスを待つ際や車内での約束やマナーを考え、発表する。

思判表

□主な活動

- ・バスの乗り方の手順やマナーを思い出し、発表する。
- ・「お金を準備する」「忘れ物を確認する」の2点に着目して、バスに乗る練習をする。

□「目指す児童の姿」「課題に向かう姿」に導くための工夫と児童の姿

教師の工夫(振り返りの工夫)	児童の姿
<ul style="list-style-type: none"> ・バスに乗る練習の様子をグループで見合い、友達のよかったところや気付いたことを発表できるようにする。 ・振り返りの視点「できたこと・がんばったこと」「バス本番で気をつけたいこと」を提示し、成果や本番で頑張りたいことを発表できるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「整理券を取っていた」「ちゃんと座っていた」「お金を落としてしまった」等、友達の様子を見合って気付いたことを発表する姿が見られた。 ・「整理券を取ることができた」「本番ではお金を落とさないように準備したい」「ボタンを押すことを頑張りたい」等と発表する姿が見られた。

単元の成果と課題(成果○、課題●)

- 同じ路線バスを利用した買い物学習を繰り返し行ったことで、バスの乗り方やマナー、買い物の仕方などについて自分の経験に基づいて課題を見付け、学習を進めることができた。
- 板書計画や実際のバスの動画、運賃箱、お買い物セット等の小物の活用、TTの明確な役割分担ができ、児童の主体的な姿が見られた。
- めあてを提示する際に、本時に頑張るポイント「お金を準備する」「忘れ物を確認する」の2点を具体的に絞って提示する必要があった。また、その際に、子どもに分かりやすく伝えるために、視覚教材の活用(お金を手に持っているイラスト、忘れ物を指差して確認しているイラスト等)ができると効果的であった。
- 振り返りで、より学びを深めるために、「できたこと」「がんばったこと」の他に、児童がバスや買い物の練習を通して「困ったこと」を取り上げ、どうすればよかったのかを全員で考える時間を設けるとよかった。

<小学部6年生「カレンダーをプレゼントしよう」～10月11月のカレンダーを作ろう～>

単元検討会の様子

導入では、児童が意欲や見通しをもって学習することができるように、動画や文字や写真等を活用して本時のめあてや役割、活動内容について確認する。

振り返りでは、評価の視点を明確にし、気持ちカードを活用する。また、次時の個別のめあてを設定する。

単元の目標

・小学部のみんなにカレンダーを作ってプレゼントすることが分かり、10月、11月のカレンダーを作る。

・色の作り方や塗り方の動画を参考にして色を作ったり、色を塗ったりする。

・「お願いします」、「ありがとうございます」など、教師や友達と言葉を掛け合いながら協力して作業する。

知 技
思 判 表

学 人

研究授業の実際

□本時の目標(本時 4/8)

・10月、11月のカレンダー作りでの自分の役割が分かり、日付を書いたり、飾りを貼ったり、写真を印刷したりする。

知 技

□主な活動

・10月の日付書き(O.T)、ふどうの飾り貼り(S.R)、カレンダーの写真印刷(M.S)

□「目指す児童の姿」「課題に向かう姿」に導くための工夫と児童の姿

教師の工夫(振り返りの工夫)	児童の姿
<ul style="list-style-type: none"> 導入で役割や個別のめあてが分かるように、役割や個別のめあてをVTRで確認したり、黒板に掲示したりする。 展開時に個別のめあてが意識できるように即時評価を行う。 個別のめあてに対して自己評価ができるように、<u>全体の振り返りの前に個別の振り返りの時間を設ける。</u> 	<ul style="list-style-type: none"> 動画で子どもたちの気持ちが盛り上がり、お世話になった先生からの応援メッセージも活動意欲につながった。 児童への即時評価や発問により、児童が個別のめあてを意識しながら活動することができた。 個別のめあてに対してじっくりと振り返り、課題についても自分で見付けるなど、次時の個別のめあてを設定することができるようになった。

単元の成果と課題(成果○、課題●)

○3名それぞれの実態に合った動画と板書により、個別のめあてや活動内容が理解できた。児童が個別のめあてを意識できていることで自分の役割に主体的に取り組み、単元を通して「やった」「できた」という歓声がたくさんあった。

○「できました」、「確認してください」などの報告を繰り返し、報告の仕方を身に付けることができた。

○活動場所や動線の工夫により、S.Rが落ち着いて学習に取り組むことができた。

○棒スイッチとプリンターをM.Sの視野に入る位置に置いたことでスムーズに操作することができたり、マグネットで、できた枚数を表して確認をしたりしたことが達成感につながった。

○飾りを貼った台紙にそれぞれが取り組んだ日付、写真を合わせることで、めあて「みんなで力を合わせて」についての振り返りができた。また、気持ちカードを準備したことで、カードを介してめあてに対しての自分の気持ちを表現することができるようになった。

●動画での個別のめあてや活動内容の説明でBGMとTIの音が重なっていたため聞きづらかった。

●O.Tの活動場所は、周囲の動きが目に入り活動に集中できない座席だったので配置を考慮する必要があった。

3 研究のまとめ

(1) 成果

ア 振り返りのポイントの掲示による振り返る視点の明確化

共通実践として、全学級に「振り返りのポイント」を掲示することで、児童に分かりやすく本時に沿った振り返りの視点を児童に示しやすくなった。常時掲示することが、児童だけでなく教師も意識して振り返りを行うことの定着につながった。「振り返りのポイント」を手掛かりにさせたり、教師の問い返しを積み重ねたりしたことで「～頑張りました」「～楽しかったです」が中心の発言から、「どのように」「なぜ」の部分も具体的に話すようになってきた。また、①～③の振り返りの視点を話し始めの言葉に置き換えて掲示したことで、ポイントが示す言葉の意味がより理解でき、伝えやすくなっていた。

イ 絵(写真)カードを使った振り返り

活動内容を絵カードや写真で示し、振り返りの場面で活用することを繰り返すことで、黒板などに提示している情報を手掛かりにして話すことを考えたり、表現カードを見て選んだりして自分から表現しようとする姿が増えた。特に、気持ちを選べるカードを複数枚準備することで、それぞれ感じたことを表現しやすくなり、言葉の表出が難しい児童にも有効的な方法となった。

ウ 個々のめあての明確化と視覚化の工夫

試行したことを基にして自分の頑張りたいことやもっとよくしたいところを考えさせたり、前時の振り返りを生かして個々のめあてを「がんばりポイント」として掲示したりしたことで、児童がめあてをより意識、理解して学習に取り組むことができた。児童が何を頑張ったらよいのかを理解することで、主体的に取り組む、達成感を得られる授業になってきている。また、個々のめあてを明確に掲示することで、具体的な自己評価ができるようになるとともに、他者評価もしやすくなった。

エ 学びの実感(振り返り)につながる即時評価

展開時に、教師がよくできているところを賞揚したり、友達から評価してもらったりする場面を設定することで、児童がめあてについて意識し、達成感を感じたり、さらに頑張ろうとする意欲をもったりすることにつながっていた。振り返りの場面で再度評価することで、児童が本時の学習について、達成感や課題をより強く感じることができた。

オ 学びをつなげるためのICTの効果的な活用

導入で前時の授業の様子を動画で見せることで、児童は、前時の様子を想起し、学習のつながりを意識することができていた。また、動画という視覚的な支援により、自分の役割やめあてが理解しやすくなり、活動意欲につながっていた。

振り返りの場面で活動の様子を撮影した映像を見ることで、めあてについてできたかどうかははっきり分かり、自己評価、他者評価をしやすくなり、頑張りや成果を実感することができた。

(2) 課題

ア 即時評価の工夫

最後にまとめて評価してしまうと、その場その時の達成感や学びの実感が弱くなってしまふことがあった。即時評価が学びの実感に効果があることが、上記の成果として挙げられた。どの場面でどのような評価ができそうか、評価の方法など、計画的に考えていく必要があると考える。

イ 振り返りの表現方法を広げるための手立て

視点のポイントに沿って話そうとする意識は育ってきているが、まだ教師の声掛けや問い返しなどの支援が必要である。今後も「なぜできたのか」「どのようにしたらできたか」「次は〇〇したい」など、自分の学びについて具体的に振り返ることを継続するとともに、言葉で表現できる児童が、自分の言葉で話すことができるように、語彙を増やしたり、文例に親しませたりするなど手立てを工夫する必要がある。

言葉の表出が難しい児童が表現するために、絵(写真)カードの種類をさらに増やしたり、友達や第三者からの評価を活用する場面を設定したりして、児童の学びの実感につながるようにしていきたい。



II 中学部の実践

I 生徒の実態

中学部は1年生8名、2年生7名、3年生8名（内訪問教育対象生徒1名）で、1・2年生は2学級に分かれているが、学年合同で学習することが多い。

意思表示については、発音が不明瞭であるが、自分の意思や感情を言葉で伝えようとすることができたり、友達や教師と簡単な会話でやりとりしながら考えを深めることができたりと対話でのやりとりが可能な生徒が多く在籍している。

人との関わりについては、生活経験が少なかったり、様々な活動に自信がなかったりするため、集団での学習に参加することが難しい生徒はいるが、他学年の友達とのやりとりや集団での活動を楽しむこともある。意欲的に学習活動に取り組もうとする生徒が多く、繰り返し取り組んでいる学習活動に関しては、見通しをもって生徒同士で声を掛け合って学習に向かっている姿が見られる。一方で、何を学んだか、学んだことをどのように整理したらよいのかなど、考えをまとめたり、伝えたりすることに課題がある生徒が多い。昨年度までのICTの研究や普段の学習におけるタブレット型端末の活用など、情報機器の操作には慣れており、情報機器を活用しながら、学びや考えを整理したり、まとめて伝えたりすることが有効な手段となっている。

2 研究の実際

(1) 学部研究の取組

中学部で目指す「課題を発見し、主体的に学ぶ」姿
学習のゴールが分かり、友達と共に学びを積み重ねながら、次の学びや自らの生活につなげようとする姿

・めあてとまとめにつながりをもたせ、ゴールを明確にしながら授業を積み重ね、振り返りで学びを定着させたり、次の課題を見付けたりしていくことで、さらに学びを広げていこうとする主体的に学ぶ姿が育成されていくと考えた。

ア 「振り返り」の捉え方の確認

学部全体で「めあて」「課題」「まとめ」「振り返り」の意味と設定にあたって何を留意するのかを確認した。「振り返り」の意義や指導のポイント、「振り返り」の視点についての確認や共通理解を行い、「学びの広がりに関連する振り返り」「次の学びや自らの生活に関連する振り返り」とはどのようなことかなど、「振り返り」の提示例を示した。（図1）

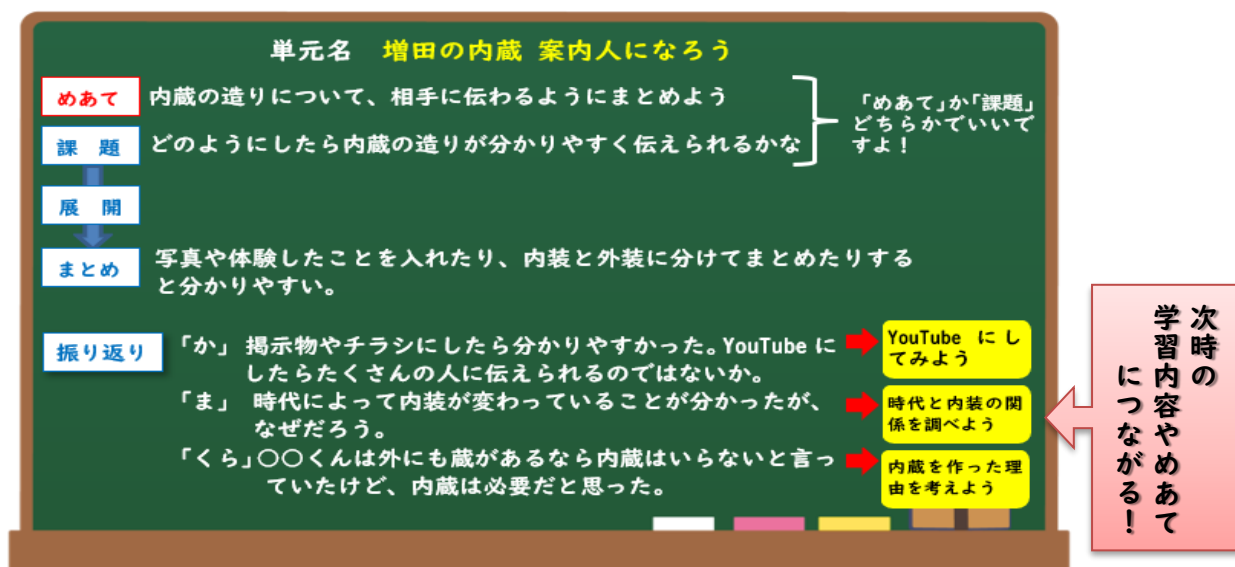


図1 「めあて」「まとめ」「振り返り」等の提示例

イ 「かまくらカード」の活用

昨年度の研究では「かまくらカード」に、かまぐらの「か」は考えたこと、「ま」は学んだこと、「くら」は比べたこととして、生徒が振り返って考えたことを記入していた。今年度は、「かまくらカード」の活用の仕方を教師が空欄部分に振り返りの視点を明記して提示するという形に変更した。「かまくらカード」を用いて視点を絞った振り返りを行うことで、次の学びや自分たちの生活につなげようとする力や自ら学ぼうとする主体性が付くと考えた。(図2)

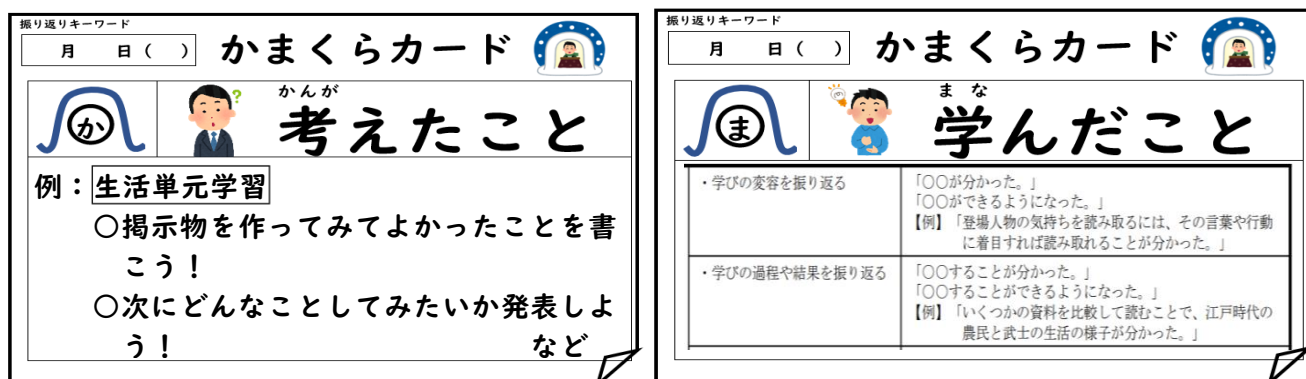


図2 「かまぐらカード」の生徒への提示例と教師側の視点例

「かまぐらカード」で提示した視点を基に、どのように振り返るかは学習集団の実態や学習内容に応じて変えている。例えば、タブレット型端末の学習支援アプリ(ロイノート・スクール)を活用してカードに記入し、みんなで見合って振り返る、「かまぐらカード」の視点を示して発表し合い、板書で振り返る、選択肢から学んだことや次に取り組みたいことを選んで伝えるなど、単元や学習活動の区切りなどで活用するようにした。生活単元学習だけでなく、他教科や合同学習でも使用し、効果的な活用について検討した。

ウ ICT を活用した学部授業研究会

学習支援アプリ「ロイノート・スクール」を活用して学部授業研究会を行った。参観の視点やグループ協議をカードで提示し、他グループの話合いも共有できるようにした。

< 中学部2年 「チャレンジ66 横手博士になろう」 >

本時のねらい：横手の特産品について調べてまとめる学習を通して、分かったことや気付いたことを発表する。

	生徒の姿	教師の手立て	改善案
導入	活動内容の理解	めあてを導く機会を捉え、めあてと学習の関わりを明らかにしよう!	
展開	活動量の確保	音声入力など頼りにした出力手段 ワークシートを個に応じて 入力の方法(採択数の準備)	まとめ方
終末	振り返りの様子	生徒のつぶやきを板書に!	

< 中学部1年 「もっと知りたい 横手の〇〇」 >

本時のねらい：他学年の友達の見聞やグループの友達の意見を基に、紹介したい相手や方法を考える。

	生徒の姿	教師の手立て	改善案
導入	見聞の共有	アットカードの活用 見聞の共有	
展開	話し合い	教師の板書 話し合いの工夫	話し合いの工夫
終末	客観的評価	板書の工夫	

【導入】

- 「めあて」が明確で、分かりやすいか
- 指示や説明は、キーワードを軸として簡潔に伝えているか
- 絵や写真の情報は適切な量であるか
- 話す語尾は最後まで明確であり、「ここ」「あれ」の指示語が多くないか
- 活動内容を説明し、「はじめてください」の直後に動きの指示をしていないか

【展開】

- 学習活動の中で、「あっ、おかしいな」「こうしよう」「やっぱりそうだ」などの気づきを促す場面があるか
- 発問してから待たずに、途中で答えを伝えてないか
- 途中で出来具合や学習態度を評価しているか
- 活動の進捗状況が視覚的に分かりやすいか
- 授業時間のほぼ全てを一対一で対応していないか
- 友達と必然的に関わり合う場面はあるか

【終末(振り返り)】

- 「めあて」が達成できたか「まとめ」で確認する場面があったか
- 発表や感想だけで「振り返り」としてないか
- 学習全体の流れに沿って振り返ることができたか
- 振り返りの時間を十分に確保できたか
- 次時へ期待させることができたか
- ◆ かまぐらカードの活用の仕方

図3 グループ協議のシート及び各視点

(2) 授業づくりの実際

<中学部1年生「もっと知りたい、横手の〇〇」>

単元検討会の様子

単元の流れに関して、生徒が前時までの学びを基に本時のめあてを決めたり、終末では次時に取り組むことを考えたりしながら、単元全体をとおして生徒が常に考えるための振り返りの方法やグルーピングについて意見を求めた。

振り返りに関しては、自分の考えを表出することに重点を置くことができるように、発表した内容を教師が板書し、共有するという形式について意見をもらった。板書を写真に残したり、ICTを活用したりするなど文章での表現にこだわる必要はないという意見が多かった。

グルーピングに関しては、大きいテーマの中でも役割分担をまとめて活動を取り入れることで、協力する場面も設定できる。そのために、一人一人が責任をもち、友達に任せっきりにならないようなグルーピングや協力の仕方を考え、活動量を十分に確保する必要があるという意見が出された。

単元目標

・甘酒とかまぐらの関係性を知ること、横手市の発酵文化やかまぐら等の伝統行事への理解を深める。

知 技

・学んだことや気付いたことを基に自分の考えを整理し、身近な人や観光客等に伝えたいことを明確にしなが
ら、掲示物やスライド資料を作る。

思 判 表

・地域の方に質問したり、調べたことを身近な人や観光客等に紹介したりする活動を通して、地域のよさを
知り、愛着をもつ。

学 人

単元の概要

横手市の気候や有名な特産物、行事について、1年生全員が複数のキーワードを挙げることができ、小学校で自分の住む地域について学習してきたことがある生徒もいる。歴史や自然について興味をもっている生徒も多く、様々な調べ学習や体験学習に対して意欲的に取り組む姿が見られる。しかし、横手市と言えば、「かまぐら」や「ぼんでん」のように、「横手の雪まつり」が有名なものであると認識はしているが、実際に参加したことのある生徒は少ない。

横手市の小正月行事であるかまぐらと甘酒の関係性について、調べ学習や体験学習を行った。なぜ「かまぐら」が行われるようになったのか、甘酒を振る舞う理由は何かなど、自分たちが知りたいことを考え、地域の方にインタビューする学習を設定した。インタビューする前に地理的要因や歴史等を調べ、自分たちの考えを整理したり、疑問点については予想を立てたりすることで、生徒が受け身にならないようにした。また、友達と自分の考えを比較したり、伝え合ったりしながら掲示物にまとめていくことで、友達と関わりながら活動でき、学びを深めることができると考えた。そのために、学校放送番組「NHK for School」を活用して、紹介記事やスライド資料を作成する際のポイントを学習する場面を設定した。また、調べたことを友達と共有しながら、何度も表現方法を変えたり、追加訂正したりしながら編集ができるように学習支援アプリ「ロイロノート・スクール」を活用した。

単元の後半では、「横手の雪まつり」と関連付けて学習を進めた。「横手の雪まつり」のおもてなしの中で地域の方や観光客に学んだことを伝える経験をとおして、相手に伝える楽しさを味わうことができると考えた。

かまぐらと甘酒について知ることで、雪国ならではの文化や自然に触れ、自分たちの住む地域の特徴や魅力を知るとともに、自分が調べたことや学んだことを整理して伝える場面を多く設定できると考え本単元を設定した。

提示授業の目標

・観光客に伝わりやすい写真や文字の配置を考え、スライド資料の作成に取り組む。

思判表

「目指す生徒の姿」「課題に向かう姿」に導くための工夫と生徒の姿

教師の工夫（振り返りに関すること）	生徒の姿
<ul style="list-style-type: none"> ・めあての一部を空欄にして、生徒がポイントとなるキーワードを考えられるようにする。 ・自分の役割が分かり、自分で進められるように、前時までに作成したスライド資料のレイアウトを提示する。 ・グループの友達の進捗状況が分かるように、学習支援アプリ「ロイロノート・スクール」の共有ノートを活用する。 ・振り返り、話し合い、発表の流れを固定する。 ・まとめや振り返りの際に話型「〇〇を△△すると分かりやすい」などを提示する。 ・「なぜ?」「理由は?」等、生徒が自分の意見について考える問い掛けをする。 ・かまくらカードを活用し、各視点で振り返る。 「か」: 考えたこと 「ま」: 学んだこと 「くら」: 比べたこと ・個人の意見をグループで共有し、グループごとに発表する場面を設定する。 ・まとめや振り返りを基に生徒が自分たちで次時の内容を考える場面を設定する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・イラストを参考に、空欄に当てはまる言葉を予想し、積極的に発言していた。 ・複数の意見が出たときは、全員が分かりやすい表現を選んでいった。 ・紙媒体のレイアウトを手元で確認しながら、タブレット型端末でスライド資料を作成したり、編集画面を見て、文字やイラストの配置を変更したりしていた。 ・友達から質問されたときに、自分のタブレット型端末で友達のスライド資料を確認し、すぐに答えたり、一緒に考えたりしていた。 ・回数を重ねるごとに、話し合いシートを基にグループ内で進捗状況を伝え合ったり、お互いのスライドを見てアドバイスをしたりしていた。 ・話型に沿って発表したり、友達の意見に付け加えて発言したりしていた。 ・ワークシートを見て根拠を述べたり、迷ったときはグループの友達に相談したりしていた。 ・「か」では、記事やスライドを作成しながら考えたことや工夫したことを振り返った。「ま」では、校外学習や調べ学習で初めて分かったことや自分の予想と違った部分を見つけた。「くら」では、お互いのグループの紹介記事を比べて、よい点やまねしたいことを発表した。 ・回数を重ねるごとに自分から発言することが多くなった。また、進行役の生徒はスムーズに進行できるようになり、グループ内の意見を全体で共有できた。 ・「次は〇〇したらいいと思う」「△△の部分はまだ残っているので続きを頑張りたい」など、自分だけでなく、グループの進捗状況も考えていた。

授業研究会での主な協議内容と改善案

中学部の「目指す生徒の姿」「課題に向かう姿」に着目した授業改善の観点

- ①学習のゴールが分かり、自ら学ぼうとしたり、友達と共に学びを積み重ねたりしているか。
- ②次の学びや自分たちの生活に関連付けたり、学びの過程を振り返ったりしているか。

(○:成果 △:改善案)

- 学んだことを基に生徒自身でめあてやまとめを考えたりする姿が見られた。また、教師が生徒の発言を全体に共有したり、問い返したりすることで、全員が考えていた。
- △生徒とまとめの内容を考える場合、「分かりやすいスライドを作ろう」というめあてよりも「分かりやすいスライドのポイントを考えよう」など課題として提示した方がよい。
- △作成時のポイントを共有する方法として、アプリ内に残すことに加え、紙媒体で提示しておくことでいつでも確認できるようになるのではないか。

指導助言【教諭（兼）教育専門監 菅原 咲希子】

- 生徒たちが主体的に学習に取り組むために

本時の授業で生徒たちは、自分のやるべきことがよく分かっていて、単元をとおしてどんな学習をするのかが分かる、今やっていることが何につながるのかゴールが分かる、生徒自身が興味をもってやってみたいと思える工夫があり、生徒は必要感をもって取り組んでいた。

- 生徒の思いや考えを生かしたり、生徒同士をつないだりする教師の支援について

本時のめあて、まとめ、次時の活動内容、スライドを分かりやすくするためのポイントを考えるときに、生徒たちの言葉を生かしていた。生徒の言葉を引き出すための発問や引き出された言葉を生かして文をつくるなど、生徒たちが主体的になって取り組める工夫がされていた。また、スライドを分かりやすくするポイントについては、生徒たちに気付いてほしい、考えてほしいという教師の願いや思いがあった。本時で出たポイントは、教師と生徒たちが一緒に学んだこととして共有していければよい。

生徒から教師にスライドづくりに関する質問があったときに「○○さんに聞いてみたら」と仲立ちしたり、グループでスライドを見合い、意見を求めるように勧めたり、グループで相談するように返したりしていた。生徒同士をつなぐチャンスは授業の中にたくさんあるが、意識していないと見逃してしまうことがある。意図のある支援が積み重ねられていた。

- 振り返りについて

今年度中学部では、次の時間につながる振り返りをするために視点を絞って振り返るということに取り組んでいる。本時では「次回のスライド作りではどんな工夫をしたいか」という視点を提示することで、友達の工夫した点を参考にしながら「次は○○したい」と振り返っていた。授業全体のまとめで終わらず、まとめたことを個に返して次にやってみたいことを考えていた。次の時間に取り組むことを確認して目に見える形で残しておくことで、生徒たちの中で授業が繋がっているということを理解し、次時への期待感が高まったり、見通しをもったりしていた。

単元の成果と課題（○成果、●課題）

- 「かまくら」と「甘酒」について、直接見たり聞いたりして、学ぶことができるように地域の麴屋とかまくら館への校外学習を設定した。質問したい内容に対する答えを事前に予想してから校外学習を実施し、予想と比較できるようにしたことで、集中して話を聞いていた。そのことで、自分たちの住む地域の文化を知り、文化に対する興味関心が高まったり、愛着をもったりすることにつながった。
- 授業のめあてや目標、まとめの一部を空欄にして、生徒の言葉が反映できるようにした。繰り返し行うことで、「今日は何かな」「前は○○をしたから、今日は△△かな」など、教師から一方的に情報を受け取るだけでなく、自分で考える習慣が身に付いた。まとめでは、話型を示すことで友達の意見に付け加えて発言したり、本時の学習内容が定着することにつながったりした。
- 他者の考えを受け入れたり、自分の考えを伝えたりすることができるように、記事やスライド資料づくりにおいて、二つのグループに分かれて活動した。さらに活動時のルールとして、困ったときはグループの友達に相談することにした。そのことで、文字やイラストの大きさ、配置だけでなく、タブレット型端末の操作においても友達に相談したり、教えたりしながら学習を進めることができた。グループごとの活動だったが、一人一つの内容を個々に担当したことで、個人の活動量を十分に確保し、自分の役割に責任をもって取り組んだ。
- 紹介記事やスライド資料を作る手段として、学習支援アプリ「ロイロノート・スクール」を活用した。文章の表現やイラストを何度も変更でき、見やすさや分かりやすさに重点を置いて作成することができた。また、共有ノート上で編集することで、友達が作ったものを参考にしたり、個々の端末で細部まで見合うことができたりした。さらに、友達や教師からの意見をすぐに反映させて変更でき、変更後もすぐに友達から確認してもらえることによって、「こうしたらどうかな」「これでどうですか」など、意見交換をする機会となった。
- 振り返りの場面では「かまくらカード」を活用し、繰り返し各視点で振り返って積み重ねたことで、自分が取り組んだことや何を学んだかななどを自分の言葉で伝えることができるようになってきた。生徒の実態として、伝えたいことはあるが、文章に書き表す活動が入ることで、自分の思いを全部伝えることが難しくなりやすい。そこで、発言することに重点を置き、教師が内容を整理して板書をした。そのことで、内容の視覚化を図り、意見を共有することができた。また、まとめや振り返りを基に次時の内容を考えることで、本時の内容の定着と「次は○○したい」「もっとこうしたい」などの意欲につながった。
- 単元の前半では、校外学習や調べ学習で得た知識や情報を紹介記事にまとめる活動を行った。紹介記事にまとめる段階では、短い文章に要約することや見出しの表現について学習したが、作ることに活動が偏り、重要な情報を押さえたり、全員で共有したりする時間が不足していた。そのため、それぞれ質問した答えの核となる部分が定着していなかった。生徒の意見を基に次時の内容を考えていく単元の中でも、知識の定着や友達との情報共有の部分に関しては、十分な時間を確保していきたい。
- 単元後半のクイズづくりでは、「自分が伝えたいこと」と「答え」のつながりが弱く、答えにしたことに迷いが生じていた。また、クイズに答えることには意欲的だが、クイズを作る活動になると、答えにたどり着くための問題文や選択肢を考えることが難しかった。何のためにクイズを作るのかということに加え、文章の組み立てや読み取りなど、国語科との関連も意識して指導していく必要がある。
- 少人数の話合いにおいて、友達からの意見を受け入れたり、他グループが作った記事やスライド資料のよいところを見付けたりすることができるようになってきたが、友達の考えを聞いて自分がどう思うかをなかなか伝えられずにいる生徒もいた。発表場面において教師が仲立ちとなり、友達からの意見や感想に対して答える場面を設けながら、自分の考えを伝える経験を重ねていきたい。

< 中学部2年生 「チャレンジ∞ 横手博士になろう」 >

単元検討会の様子

指導計画が、「地理」「歴史」「文化」「食」のテーマごとに「調べる」「作る」「発表する(生徒同士)」活動を繰り返す流れになっている。単元を通して「調べる」「作る」「発表する」という活動ごとの流れの中でテーマを取り上げる方がすっきりすると思う。

単元を構成する各教科等の内容は、社会科が中心になっているが、美術科や音楽科等も含まれる内容になっているため、他教科との関連を詳しく分析する必要がある。また、生徒一人一人の活動量や内容を精査できるように、単元構想をフローチャートで表したり、分析したりする必要がある。

単元(題材)の目標

- ・横手市について調べる学習や街歩きなどを通して、横手市の歴史や文化を知る。 知 技
- ・横手市の歴史や文化について学んだことや気付いたことを掲示物にまとめたり、発表したりする。 思 判 表
- ・横手市についての調べ学習や街歩きへの意欲をもち、掲示物づくり、発表などに進んで取り組もうとする。 学 人

研究授業の実際

- 本時の目標(本時 7/34)
 - ・横手の特産品について調べてまとめる学習を通して、分かったことや気付いたことを発表する。 思 判 表
- 主な活動
 - ・横手の特産品の紹介カードを作る。
 - ・自分が作った紹介カードを紹介する。
- 「目指す生徒の姿」「課題に向かう姿」に導くための工夫と生徒の姿

教師の工夫(振り返りの工夫)	生徒の姿
<ul style="list-style-type: none"> ・自分が調べたり、友達の発表を聞いたりして分かったことを発表できるように、<u>振り返りの視点や話型(「〇〇について△△ということが分かった」)</u>を示した「かまくらカード」を提示して、<u>どんなことが分かったか</u>問い掛ける。 ・自分が分かったことを具体的に伝えられるように、紹介カードをタブレット型端末上で操作したり、大型モニターを指差したりする場面を設定する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分が作った紹介カードに書かれている内容から、分かったことを自分なりに選んで発表する姿が見られた。 ・友達の発表を聞いて、「おー」と驚いたり、「すごい」と発言したりする姿が見られた。 ・言葉にして表現することが難しい生徒が、教師の問い掛けに対してモニターを指差して発表する姿が見られた。

単元の成果と課題(成果○、課題●)

- 紹介カードの作成では、タブレット型端末の活用を繰り返すことで、書字に苦手意識のある生徒が意欲的に文字を入力する場面が見られた。内容についても、写真を挿入したり、「いつから」「どこで」「どのくらい」などのポイントを紹介文に入れたりして、見る人が分かりやすい内容のカードを作成できるようになった。
- 横手について調べたり、見学したりした内容を掲示物やスライドにまとめる活動を通して、地名や特産品、名所への理解が深まり、地名を正しく読めるようになったり、特徴を自分なりの言葉で説明できるようになったりした。
- 自分たちの学習の成果を他学年や外部講師に発表し、評価してもらう機会を設定することで、自分たちの取組に対する達成感や満足感が得られた。
- 言葉で振り返ることが難しい生徒には、選択肢を提示したり、成果物を用意したりして、指差しや簡単な言葉で伝えられるようにしたが、同じような内容になってしまうことがあったため、選択肢の内容や振り返りの方法を検証していく必要があった。
- 本時の振り返りと小単元の振り返りの時間の内容が曖昧になってしまうことがあったため、本時の振り返りと小単元の振り返りの違いを明確にする必要があった。

＜中学部3年生「すてきな高等部生になるために」＞

単元検討会の様子

単元の流れや他の教科等との関連について確認した。また、職業的な内容を多く取り入れた生活単元学習ということもあり、毎時間の各授業のめあてとまとめの関連についても確認した。振り返りについては、授業ごとに行うのか、それとも単元を通して行うのかについて検討した。

単元の目標

- ・高等部の教師や生徒に質問したいことを考えたり、質問の答えをまとめたりする活動を通して、高等部の学習や生活で楽しいことや大変なことを知る。 知 技 思判表
- ・高等部への理解を深め、高等部入学後の生活への期待感を高めたり、今後の生活の中で見直すことを考えたりする。 学 人

研究授業の実際

□本時の目標(本時 6/12)

- ・高等部の教師へのインタビュー結果やこれまでの生活を基に、すてきな高等部生になるために、頑張ることを考える。 思判表 学 人

□主な活動

- ・高等部の教師へのインタビューの内容をグループごとに紹介する。
- ・すてきな高等部生になるために、卒業まで頑張りたいことを考え、発表する。
- ・高等部の教師へのインタビューの振り返りをする。

□「目指す生徒の姿」「課題に向かう姿」に導くための工夫と生徒の姿

教師の工夫(振り返りの工夫)	生徒の姿
<ul style="list-style-type: none"> ・高等部の教師へのインタビュー結果と今までの学習(作業学習や職業分野)を比べ、<u>かまくらカード(くら)に気付いたことを記入する時間を設定した</u>。また、モニターを使って一人一人の気づきを紹介した。 ・活動時間を短縮できるよう、ロイロノート・スクール(学習支援アプリ)を使用し、ワークシートを配付したり提出したりできるようにした。 	<ul style="list-style-type: none"> ・高等部の教師のインタビュー結果とこれまでの自分の経験を比較し、「挨拶や返事が大切と言っていたので、自分も頑張りたい」や「健康管理も頑張っていきたい」などの新たな気づきをワークシートに記入する姿が見られた。

単元の成果と課題(成果○、課題●)

- めあての内容が具体的になるよう生徒に問い掛けたり、めあての一部を空欄にして考える時間を設定したりしたことで、興味をもって授業に参加し、導入への意欲付けにつながった。
- 中学部卒業まで頑張ることを具体的に考えられるよう、「いつ」「何を」「どのように(頑張る?)」を示したカードを使用した。項目を分けたことで、内容を整理して考えることができた。
- 単元の後半は、授業の学習活動により関連性をもたせたことで、生徒の考えをつながげながら授業を展開することができた。また、生徒の発言に「なぜ?」「どうして?」と問い掛けることにより、さらに思考を深めることができた。
- 単元を通してロイロノート・スクール(学習支援アプリ)を活用してきたことで、生徒たちの機器操作がスムーズになり、学習活動の効率化を図ることができた。
- 単元を通して、より主体的に考えを深めていける手立てが不足し、生徒が受け身の姿勢になることがあった。授業のめあてを確認する際に、まとめや振り返りまでの流れをイメージできるようにすることで、さらに学習意欲を高めたり、新たな学習課題の発見につなげたりすることができたのではないかと感じた。
- 授業のまとめと振り返りにおける生徒の発表が同じ内容になってしまうことがあった。教師側で生徒の反応を具体的に予想し、振り返りの視点をさらに明確にしておく必要があった。

3 研究のまとめ

(1) 成果

ア 学習を見通す力や意欲の高まり

・「めあて」「課題」「まとめ」「振り返り」の設定について学部全体で確認し、「振り返り」を意識した授業展開をすることで、教師がまとめや振り返りの時間を確保しようとする意識が高まり、学習の流れが明確になった。そして、生徒が授業のゴールを具体的にイメージしながら学習に取り組むことができるようになり、授業への積極的な態度が増えてきた。また、「かまくら」カードを活用した振り返りを行い、次時の課題を生徒自身が導き出して取り組むことで、学習内容が明確になり、より学習に対する意欲や主体性が向上した。

イ 学習の定着を目指した振り返りの工夫

・「かまくらカード」で視点を明確にし、生徒自身の言葉で学びを振り返ったことで、何を学び、学びをどのように生活に生かしたいのかなどを具体的に考えることができるようになった。1年生では、かまくらや甘酒に関するスライド資料の作成に当たって次にどのような工夫をしたいのかという振り返りを行った。本時の学習を基に考えることで、学びを再確認する場になっただけでなく、振り返ったことを言葉にして発表することで学びを整理することにもつながった。2年生は、制作した地元特産物の紹介カードを大型モニターに映し、指差したり操作したりしながら振り返りを行うことで、学習集団全体で学びの定着を図ることができた。3年生は、学んだことや友達の考えを比較する振り返りを行い、考えを書き表すことで学びを整理することができた。記入した内容は2年生同様大型モニターで共有した。生徒の実態や学習内容に応じて、生徒が発表したことを板書でまとめたり、書き表して整理したりするなど、振り返りの仕方を工夫することで、学習の定着が促された。

・「かまくらカード」を活用し、視点を絞った振り返りを行った。視点を絞ったことで、考えることが明確になり、主体的に発表する姿が増えた。2年生のように振り返りを発表する際に、話型を提示することで、本時で何が分かったのかを具体的に伝えることにつながり、学びの整理と定着が図られた。

ウ 対話による学び合いや ICT の活用と振り返り

・話し合いながら学びを深めるため、共同編集できる学習支援アプリ「ロイロノート・スクール」を活用した。グループ内で分からないところを聞いたり、文字の大きさや配置などのデザインを検討したりするなどしたことで、不安なく学習に臨むことができただけでなく、考えを見付け出すきっかけにもなった。学びがより深まったことで、学習をスムーズに振り返ることができたり、次時への見通しがもちやすくなった。発表ツールとしても活用し、書字や考えの整理に時間を要する生徒が有効に時間を活用して発表したり、考えを共有したりしながら振り返ることができた。

(2) 課題

ア 「かまくらカード」の視点と活用の仕方

・学習の区切りや単元をまとめる際に、振り返りとして「かまくらカード」を活用してきたが、その視点がはたしてよかったのか検証が十分にできなかった。めあてとまとめの整合性が図られ、何をどのように学んだか、何に取り組んだかといったことは、教師からの問いやそれに対する発言で十分理解できていると考える。しかし、振り返りで活用した「かまくらカード」の「か」「ま」「くら」の視点のどれが振り返りとして適切だったのか、視点の有効性について十分話し合うことができなかった。学びを効果的に振り返ったり、学びを定着させたりするための視点について検証していきたい。

イ 学習の流れと時間の確保

・学習の流れが定着してきたが、多くの時間を振り返りに費やしてしまうことがあった。前述のように振り返りの仕方や視点に不安があったり、生徒の言葉を引き出すために多くの時間を要したりすることが多かった。振り返りの目的が曖昧にならないように視点を絞る、一単位時間の時間配分を見直す、単元構想の段階で振り返りの内容の検討や時間を十分に確保するなどの取組が必要だと考える。

ウ 学びの般化と振り返りの工夫

・学級の実態や学習内容によって「かまくらカード」の活用の仕方を変えたことで、主体的に振り返るようになってきた。学びを般化させていくためにも、「かまくらカード」を活用しながら普段の生活や他教科との関連性を意識付けるなど、より深い学びの定着を図っていく必要がある。また、考えをまとめたり、伝えたいことがあったりしても表現することが難しい生徒がいた。言語以外の表現方法を模索したり、教師とのやりとりから生徒の考えを読み取って代弁したりするなど、生徒の実態に応じた主体的な振り返りのもち方を工夫し、さらに生活に生かせる学習へと結び付けていきたい。



Ⅲ 高等部の実践

1 生徒の実態

現在、高等部には41名が在籍しており、言語のみでの理解は難しいが、写真やイラスト、動画などを活用し視覚的に提示することで理解が深まる生徒がいる。一方で、書字に対して苦手意識のある生徒はタブレット型端末を使用することで、意欲的に学習に取り組むことができるようになってきている。国語科、数学科、職業科、家庭科の各教科では、学年に応じて個々の実態や将来の進路希望に沿ったグループ編制がされており、各授業において効果的にICTを活用し、知識やスキルの定着や向上を目指した授業づくりが進められている。

今年度の高等部の研究対象授業は家庭科とした。家庭科の授業は、生活と結びつきやすい題材を多く設定でき、生徒らが意欲的かつ理解を深めながら学習に取り組んでいる。昨年度は職業科で研究を進め、単元(題材)を見通す工夫や、学習の意味や意義を理解する工夫を取り入れることで、生徒が学びを実感し、主体的に学ぶことのできる授業につながったことが成果として挙げられる。家庭科の教科の特徴と研究成果の活用を踏まえた上で、今年度の研究テーマ「課題を発見し、主体的に学ぶ児童生徒の育成～児童生徒の『振り返り』が次の学びにつながる授業を目指して～」に向かって授業づくりを進めることができると考えた。一方で、昨年度の課題から生徒の思考活動を充実させ、主体的に学び、日常に生かすことができる資質・能力を身に付けるための授業づくりも進めていきたい。そのために、題材ごとの振り返りや授業のまとめにおいて、学校生活や家庭生活への般化を理想とする授業の在り方を探っていききたい。

2 研究の実際

(1) 学部研究の取組

学部研究会①で実施した高等部職員へのアンケート結果では、どの授業においても授業者の大半が、振り返りの時間を確保している、振り返りの視点を提示しているとの回答だった。

一方で、振り返りの仕方を工夫している職員は4分の1程度と少ない結果となった。

そこで、研究部が中心となって高等部の授業参観をし、振り返りの時間の実際、振り返りの視点の内容、振り返りの仕方の工夫について調査していくこととした。

学部研究会②では、改めて学年ごとに「高等部の各学年で目指す『課題を発見し、主体的に学ぶ』姿」(表1)、「高等部の各学年で考える振り返りの在り方」(表2)について話し合った。以下に示す内容は一部であるが、各学年から次につながる意見が多く出た。

表1 高等部の各学年で目指す「課題を発見し、主体的に学ぶ」姿

1年生	2年生	3年生
○目指す児童生徒の姿		
<ul style="list-style-type: none"> ・学習のねらいやゴールが分かる ・人からの意見を素直に聞ける 	<ul style="list-style-type: none"> ・伝え合って、認め合う力がある ・選ぶ(選べる)力がある ・学習したことを身に付け、生活に生かしていく 	<ul style="list-style-type: none"> ・めあて(学習内容)が分かり、次の課題を自ら発見する
○課題を発見する姿		
<ul style="list-style-type: none"> ・動画や画像を見て課題に気付く 	<ul style="list-style-type: none"> ・課題を自分のこととして捉え、自ら行動に移す 	<ul style="list-style-type: none"> ・学習を自分のこととして捉え、自分の生活と関連付けて考えている
○主体的な姿		
<ul style="list-style-type: none"> ・成功経験が積み重なり、同じような場面で自分から行動する ・経験から、自分で考え、判断する材料を増やし、行動できるようになる 	<ul style="list-style-type: none"> ・分かって動く ・気付いて動く 	<ul style="list-style-type: none"> ・課題に対して自分の経験や友達のをもとに解決していこうとする ・実生活と結びつける

表2 高等部の各学年で考える振り返りの在り方

1年生	2年生	3年生
○現在の授業における「振り返り」の方法		
<ul style="list-style-type: none"> 分かったか、できるかを小テストをしたり、実際に行ってお互いの様子を見て評価し合ったりする 	<ul style="list-style-type: none"> 実態把握から、生徒によって違うやり方をする 学んだことに気付く工夫をする 	<ul style="list-style-type: none"> 感想発表、感想記入をする 振り返りで、チェックシート、○×などを用いる

学部研究会③では、学部研究会②で学年ごとに出された「高等部の各学年で目指す『課題を発見し、主体的に学ぶ』姿」、「高等部の各学年で考える振り返りの在り方」を、生徒の実態に応じたものにしたと考えた。そして、学年という枠ではなく、高等部としてまとめたものについて確認した。

表3 高等部で目指す「課題を発見し、主体的に学ぶ」姿

項目	そのための手立てや授業構成など
<p>○目指す生徒の姿</p> <ul style="list-style-type: none"> めあて(学習内容)が分かり、次の課題を発見する姿 学習したことを身に付け、生活に生かしていく姿 	<ul style="list-style-type: none"> 適切なめあてや学習内容を設定する 振り返りの中で、生活と結びつけられるようにする
<p>○課題を発見する姿</p> <ul style="list-style-type: none"> 課題(学習)を自分のこととして捉え、自分の生活と関連付けて考えている姿 	<ul style="list-style-type: none"> 生徒一人一人に合うやり方での教師(生徒同士)による即時評価をする 動画や画像を活用する
<p>○主体的な姿</p> <ul style="list-style-type: none"> 経験や学習から、同じような場面で自分から行動する姿 	<ul style="list-style-type: none"> 課題に対して自分の経験(学習)や友達のを考えを基に判断し、解決する経験(学習)を積み重ねる

表4 高等部としての振り返りの在り方の一例

考える・伝える	選択する	受け入れる
<ul style="list-style-type: none"> 発表や記入をする 小テストを受ける 次の目標を立てる 生徒間で評価する 	<ul style="list-style-type: none"> チェックシートを活用する ○△×など選択する 	<ul style="list-style-type: none"> 教師が評価する 生徒間で評価する

※いずれにおいても、視覚的手立てとして、めあてやゴールの提示、ICTの活用をしている。

学部研究会④では、これまでの学部研究会、アンケートおよび授業参観より「生徒自身の振り返りの段階」を提示し、学年ごとに検討した。

研究対象外の授業においても、概ねめあてを提示することができており、振り返りの時間を5～15分確保し、生徒主体のまとめや振り返りが行われていた。授業全体で、生徒が意欲的に取り組めるような教師の工夫が見られた。国語科では、作った俳句を廊下に掲示して他学年や多くの教師に見てもらう機会を設定することで、見た人からアドバイスや評価をしてもらい、さらに意欲を高めた。作業学習では、繰り返しの作業内容を設定することで、本時の学び(褒められたこと、できたこと、反省したことなど)を振り返りつつ、次の時間の目標を立てた。数学科においては、生徒が数字並べに取り組んでいる様子を撮影し、動画を見て振り返るといったICTの活用が見られた。

教科による特性を生かしたり、ICTを活用したりしながら、生徒が適切に授業を振り返り、次時に意欲をもてるよう教師の工夫があったことを参考にして、高等部の「生徒自身の振り返りの段階」を整理した。

(2) 授業づくりの実際

どの授業においても、生徒の実態に合わせて、生徒の将来に向けて必要な知識や技能をいかに育てるかを考えられた展開が多く見られた。2学期以降は授業研究会も行われ、各授業研究会で学んだことを自分の授業に取り入れる教師がいた。授業研究会においては、授業改善Coが入っての単元構想会を行ったことで、TIを柱とした効果的なTTの授業を展開できた。

<高等部1年生「家庭生活と環境～私たちのリサイクル～」>

単元（題材）検討会の様子

授業者全員と授業について話し合う機会をなかなかもてずにいたが、当日の授業の時間配分等細かい部分についても話し合った。普段から生徒と接している教師からの助言が参考になった。

また、学習指導要領に基づいた題材の構想を改めて考える機会となった。

題材の目標

- ・リサイクルの仕組みが分かり、自分でできるリサイクル活動について知る。 知 技
- ・リサイクルが環境へ及ぼすよい影響を知り、ごみを分別したり自分ができるリサイクル活動を考えたり、調べたりする。 思 判 表
- ・資源の再利用について、グループで話し合ったり、調べたりして、身の回りや家族でできるリサイクル活動を実践しようとする。 学 人

研究授業の実際

□本時の目標（本時 9/11）

- ・横手市やスーパーのリサイクル方法を知り、グループでリサイクル活動を行う。 知 技

【1段階Cイ(イ)】

□主な活動

- ・グループに分かれてリサイクル活動（ペットボトルのラベルはがし、アルミ缶とスチール缶の分別、新聞・雑誌の結束）を行う。リサイクル活動をしての気づきや疑問に思ったこと、感想をグループごとに記入する。
- ・グループごとのまとめを全体で共有し、個別の振り返りシートにその時間での学びについて記入する。

□「目指す生徒の姿」「課題に向かう姿」に導くための工夫と生徒の姿

教師の工夫（振り返りの工夫）	生徒の姿
<ul style="list-style-type: none">・「<u>題材計画振り返りシート</u>」を作成し、題材の時間ごとの目標を記入した。・グループでの<u>振り返り時間、発表時間を設定した。</u>・2回目のリサイクル活動はやってみたい活動を生徒が選択できるようにした。	<ul style="list-style-type: none">・生徒が学習内容に見通しをもち、題材全体のイメージをもつことができた。・他のグループのリサイクル活動の様子を知ろうと発表に耳を傾けていた。・他のグループの発表を聞いていたため、自分でやりたい活動を選択することができた。

題材の成果と課題（成果○、課題●）

- リサイクル活動を取り入れたことで、実践的、体験的な活動を取り入れた学習になり、家庭生活へつながる展開にできた。
- 生徒同士で協働し、意見を共有して互いの考えを出し合う機会を設定することで、それぞれが自分の考えを出すことができた。
- ワークシートにより、学習の軌跡を残すことにつながった。振り返りもワークシートを活用することで自己評価ができた。この学習スタイルを生徒が分かって授業に臨んでいた。
- 生徒に発問するタイミングや内容、言葉を精選する。
- 生徒が考える場面と教師が教える場面の組み合わせやバランスを検討する。
- 資料を掲示したり、映像を活用したりするなど、「リサイクルの流れ」についてのイメージをもてるような視覚的支援を導入する。

<高等部2年生「元気なからだをつくる食事」>

単元（題材）検討会の様子

「栄養素」をポイントに、生徒にとって実感を伴って学び、身に付けることができる知識、技術という視点で話し合った。既習の知識を生かしながら取り組むことができ、かつ、実生活に生かすことができる学びという観点で計画を立てることにした。五大栄養素やその働き、食品を栄養素の観点での分類、実際の弁当を参考にした栄養バランスについての学習、自分たちで考えた献立での弁当作りを主な活動にするという、大まかな流れを決めることができた。

題材目標

- ・五大栄養素とその働きについて基本的な知識を得る。 知 技
- ・健康によい食習慣について考えたことを基に、食品を選択し、弁当の献立を考える。 思 判 表
- ・調理をとおして、栄養バランスのよい食事についての意識を高め、より健康的な食生活をしようとする。 学 人

題材の概要

健康な生活とは何かを考え、五大栄養素についての知識を得、バランスのよい食事にするための問題点を見出し、献立を考えることで自分の食生活をより豊かにすることを目標とした。生徒は、理想的な食生活のイメージはあるが、食品に含まれる栄養素やその働きについての知識は部分的であり、バランスがよいとされる食事の根拠を具体的に示すことが難しい。また、自分で惣菜や弁当を購入する機会や、栄養面を意識して食事を作る経験も少ない。そこで、余暇の充実や卒業後の生活を見据え、より健康的な食生活を送ることができるようこの題材を設定した。

研究授業の目標

- ・献立を紹介したり、五大栄養素を基に自分の意見を伝えたりする。 思 判 表
- 【1段階Bア、イ】

「目指す生徒の姿」「課題に向かう姿」に導くための工夫と生徒の姿

教師の工夫（振り返りに関すること）	生徒の姿
<ul style="list-style-type: none"> ・教材プリントの冊子の中に「目標と振り返り」のページを設けた。1単位時間ごとに目標と振り返りを記入し、<u>学びの積み重ねが分かるようにした。</u> ・振り返り欄は、<u>目標を達成できたかを【○ △ ×】を選択した後、その理由などを記入する形式にした。</u> ・振り返りを記入する前に<u>考える視点を口頭や板書で提示した。</u> ・実生活との結びつきを考えられるように、「自分の生活に生かしたいこと」という欄を設けた。 	<ul style="list-style-type: none"> ・見通しをもって授業に参加することができるようになり、授業前に前時の「目標と振り返り」のページを開いて開始を待つようになった。 ・記号を選択することで、全員が自分の意思を示すことができた。 ・学んだ内容から最も印象的だったことや頑張ったことなどを詳しく記入することができた。 ・学習内容から、家庭でできそうなことに気付いて家庭で取り組んでみたいことなどを記入することができた。

授業研究会での主な協議内容と改善案

「学習内容が分かり、目標の達成に向けて学習活動に取り組んでいるか。」「生徒は、目標を自分のことと捉え、自分の生活と関連付けて考えているか。」という視点で協議を進めた。一つ目の視点に関して、学習の流れを理解し、タブレット型端末を活用しながら、友達の発表に対して意見や感想を伝えるなど、進んで授業に参加する様子が見られたという意見が挙げられていた。一方、二つ目の視点については、目標や振り返りの視点をより具体的にし、生徒が授業内容を実生活に生かそうとするための支援や働きかけの工夫の余地がある、という意見が聞かれた。題材目標と毎時間の授業目標との整合性、教師の発問の工夫や補助説明のタイミングなどを検討する必要があるという改善案が示された。

指導助言【授業改善コーディネーター 教諭 佐藤恵】

□ICTの活用について

タブレット型端末の学習支援アプリを活用した授業。文字を書く、伝えるなど生徒の苦手をカバーしたり、弁当の献立（おかず）を操作することで弁当のイメージをもたせたりすることに効果的だった。

□指導目標の見通しについて

題材を通した目標を意識できていた。食事の役割や栄養について学んできており、「ビタミンがあるから病気にならない」など、既習事項を活用することができていた。

指導計画、小題材の目標、評価規準に「知る・興味をもつ」→「根拠をもって説明する」とステップを上げて段階的に理解に結びつけようとしていた。家庭科では、実感を伴った学び方が非常に効果的であり、終盤で調理実習を行うという題材の構想がしっかりしていた。

□「振り返り」について

毎時間、目標と振り返りをワークシートに記入した。1単位時間の中で振り返りをすることが習慣化されており、繰り返し取り組むことで生徒がやり方を分かっていた。振り返りの視点として「これから生活に生かしたいこと」については、教師が「自分で弁当を作るとしたら・・・」「コンビニで弁当を買うとしたら・・・」と生徒の実態に応じて問い掛けていた。

□今後期待すること

考えを適切に伝える力はあるが、やや受け身的な面が見られた。栄養素を選択するだけでなく、さらに掘り下げた意見を求めてもよいと思う。また、振り返りの紹介で考えを深めるための問い掛けがあったが、「疑問や課題が生徒から出るような問い掛け」も可能であると思う。教師の補助説明を発問に切り替えていくことができるとよいと思った。

題材の成果と課題（○成果、●課題）

○生徒全員が五大栄養素の種類とその働きを共通の知識とし、献立を考えたり、友達の発表に対して感想を伝えたりすることができた。

○栄養素への関心が高まった。授業時間以外でも、給食の献立が話題になったときに「このメニューでビタミンが摂れます」などの発言が聞かれるようになった。

○授業の流れが分かり、目標を意識して授業に臨み、授業の最後に自分の学習についての振り返りをすることが定着した。

●栄養バランスについての考え方を広げる。一食で一日に必要な栄養を全て摂取することは難しく、一日を通してバランスのとれた食事をする必要がある。今回の学びをより実生活に生かせる考え方を身に付けられるような展開を工夫したい。

●目標をより具体的にしたり、振り返りの視点を絞ったりすることで、「何を学ぶか」というゴールを明確にする。提示授業では「紹介した献立に対する友達のコメントややりとりから考えたこと」についての記入を求めたが、記入の観点がまちまちになってしまった。教師がねらった学びに迫る気付きや今後の生活に生きる工夫などを引き出せる目標設定、振り返りの時間を設定したい。

<高等部3年生「場面に合わせて衣服を選ぼう」>

単元（題材）検討会の様子

自分に合った服装を入れ替えながら考えるツールとして、学習支援アプリ「ロイロノート・スクール」が有効ではないかとの意見があったので、生徒の実態に合わせて取り入れることにした。タブレット操作の難しい生徒については、実物を準備し、視覚や触感で選べるようにしたり、イラストカードで選択肢を絞って選べるようにしたりするなどの手立てを講じ、みんなで考える、操作するなど、生徒の反応を大切にしながら授業づくりを進める方向とした。

題材の目標

- ・衣服の社会的役割やフォーマルとカジュアルの違い、選ぶ際のポイントについて知る。 知 技
- ・TPO に合わせて優先すべき視点を考えたり整理したりし、衣服を選択する。 思判表
- ・場面に応じた衣服の選択方法を身に付け、家庭生活や社会生活の中で実践しようとする。 学 人

研究授業の実際

□本時の目標（本時 3/5）

- ・TPO にふさわしい服装が分かり、コーディネートを考えたり選んだりする。 知 技 思判表
- 【1段階Bウ(ア)】

□主な活動

- ・「成人を祝う会」に出席する際の服装のポイントについて考える
- ・自分なりのコーディネートを考える、選ぶ
- ・コーディネートやアイテムを選んだ理由を挙げる

□「目指す生徒の姿」「課題に向かう姿」に導くための工夫と生徒の姿

教師の工夫（振り返りの工夫）	生徒の姿
<ul style="list-style-type: none"> ・生徒の実態に応じた課題や選択肢の数、種類提示方法の工夫 ・生徒自身が活動を振り返り、気付いたことを表現するための発問の具体化 ・生徒それぞれが考えたコーディネートを、全体で視覚的に共有（ICTの活用） 	<ul style="list-style-type: none"> ・触る、見る、数種類の中で比較する等、それぞれに合った方法で自己選択し、理由付けをすることができた。 ・友達のコーディネートと比較し「〇〇がよかったのでまねしたい」など、具体的な言葉で表す生徒の姿が見られた。 ・自分の考えを認めてもらう達成感や、友達の考えと比較して新たな気づきを得る姿が見られた。

題材の成果と課題（成果○、課題●）

- 生徒に応じた課題の提示をすることで、自己選択を促すことができた。
- 積み重ねた学習経験を基に、選んだ理由を明確にしたり、考えを自分なりに表現したりすることができた。
- TPO についてどの場面でのどのような服を着るべきか表にまとめたことにより、大まかな基準をもち、衣服の選択に生かすことができた。
- 発問をより具体的にすることで、生徒が自分の考えを具体的に、即時に表現することができた。
- 学び合いを活性化するための、生徒同士のやりとりや関わりの場面を設定する。
- 板書計画と教材配置の整理や工夫をする。
- ワークシートなど生徒の発言、気づきを残していく工夫をする。
- 「似合う」「ふさわしい」「場に合っている」「TPO」など、言葉の整理と精選をする。
- メリハリをつけるために静と動の活動を組み合わせる。
- 言葉で書く、○を付けるなど、実態に応じた振り返りを工夫する。

3 研究のまとめ

(1) 成果

ア 振り返りの段階の整理

高等部では「振り返り」というテーマをもって授業実践と学部研究会を重ねることで、生徒自身の振り返りの段階を図1のように整理した。

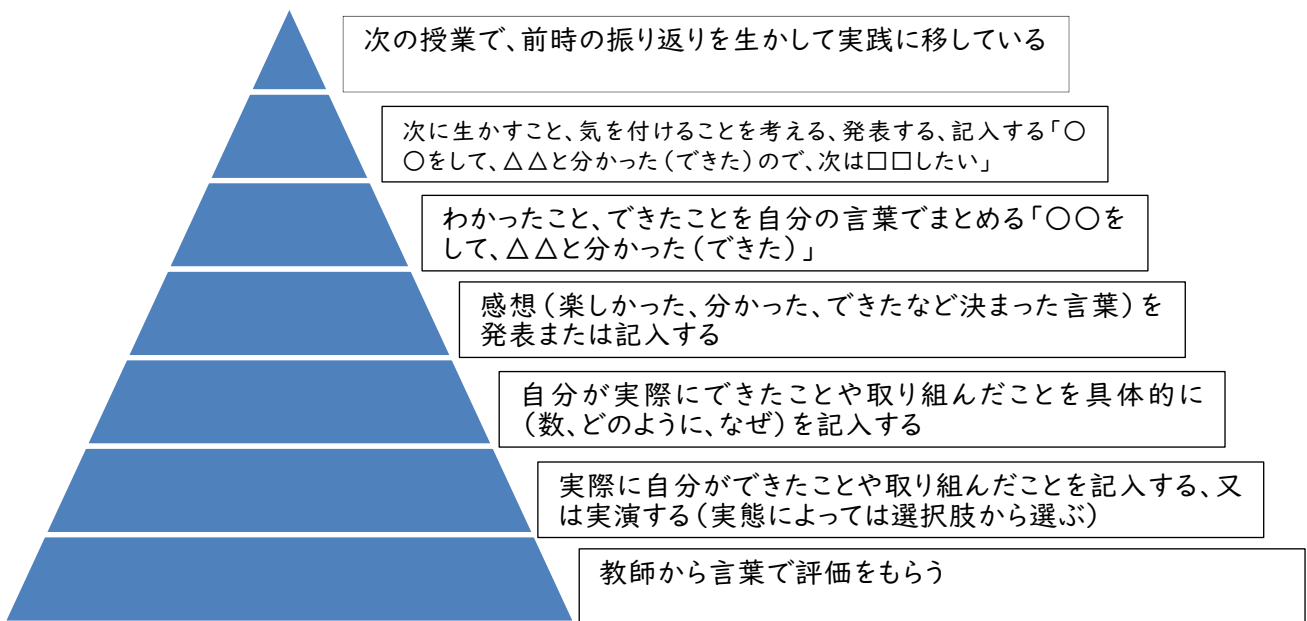


図1 振り返りのステップアップ

生徒が振り返るために以下のような工夫も多く見られた。

活用した教材、ツール

・写真、動画 ・チェック表 ・ワークシート(穴埋め、クイズ形式など) ・板書

ただし、単に「メモをして」「工程表を見て」では、生徒によっては適切な支援とは言えないこともあった

イ 学習意欲の向上や生活へ般化するための工夫

振り返りから次の目標や見通しをもてるように、生徒の生活とつなげる工夫があった。例えば、卒業後の生活を取り上げる(成人を祝う会、みんげんき会、運転免許など)、広告(チラシ)を活用する、実習や授業中の生徒の発言を取り上げることで学習意欲へとつながった。

同じ題材の中でも、個別のねらい、どのように学ぶかの過程の違い、振り返りの在り方に生徒の実態や得意なこと等に合わせた工夫が見られた。また、同じ流れを繰り返すことで、生徒自身が見通しをもち、進んで準備をしたり、発言をしたりする姿が見られたことも学習意欲につながる成果として挙げ、学部全体で共有した。授業の振り返りについての協議を重ねる中で、「生徒の難しいところだけでなく、できているところにも目を向けていきたい」「授業担当から担任に、できたところや難しいところを伝えられるといい」など、視野の広い意見が出た。これらも共有し、来年度の授業づくりへ生かしたい。

ウ 生徒の変容

振り返りに関する工夫を行い、実践を重ねていく中で、生徒がどのように変容したかについてまとめた。

振り返りの工夫	生徒の変容
・達成できそうな「めあて」を提示する	→ 振り返りに取りかかりやすくなった
・写真を活用して振り返る	→ 客観的に見られたことで、達成感を得られた
・振り返りの視点を絞る、明確にする	→ ワークシートに振り返りを具体的に記入できた
	→ 次時の目標を自分で設定できた
・目標を「何を、どのように」と具体的にし、振り返り時に再確認する	→ 繰り返し行うことで、目標を意識したり、やり方を覚えたりすることができた
・振り返った内容を表で一覧にする	→ 前時と比較して振り返られるようになった
・教師や生徒の経験を話す	→ 「自分も」と共感しながら、自分のことも話せた
・プラスの言葉で返す	→ 前向きになり、次の活動への意欲になった

(2) 課題

ア 「めあて」と「まとめ」「振り返り」の整合性

生徒個人における学びの定着、生徒全員が分かっているかどうかの判断という部分では難しいことがあった。また、「振り返り」と「まとめ」の違いを意識し、どちらもあるいはどちらかを適切に取り入れていく授業の展開が難しいこともあった。さらに、「振り返り」をするためには、適切な「めあて」を提示するという原則が大事であるという意見や、教師の発問の精選という反省が出された。実際、めあてに「〇〇しよう」というものが多く、それに対するまとめは「〇〇した」で簡単に終わる授業も多く見られた。生徒が何を学び、次につながることは何であるのかが分かる目標やめあての設定、次の目標を自ら考えられるようなまとめや振り返りの在り方を検討する必要がある。

まとめ

本時の「めあて」や学習課題に対して、今日の授業で「何を学んだか」を明確にする活動

振り返り

学びや成果や実感、学んだことや意欲、問題意識等を生活や次時へつなげるため、学びを振り返ること
(稲川教頭による全校研修会参照)

イ 効果的な ICT の活用

ICTの活用に関しては、現段階では授業者個人に委ねられている部分が多い。効果的であるという認識はあっても、授業で活用するとなると準備に時間が掛かったり、操作の仕方が不安になったりという理由から敬遠してしまうことがあった。振り返りの場面を中心として、写真や動画の活用、タブレット型端末の学習支援アプリ「ロイノート・スクール」や「Keynote」等の活用について学部間で情報共有し、活用の場を広げていきたい。



參考資料

□実施日:①R5年7月 ②R5年12月

□対象生徒:中学部1・2・3年生(1年8名 2年7名 3年8名 計23名)

①1年8名 2年7名 3年7名 計22名<回収率:95%>

②1年7名 2年1名 3年6名 計14名<回収率:60%↓>

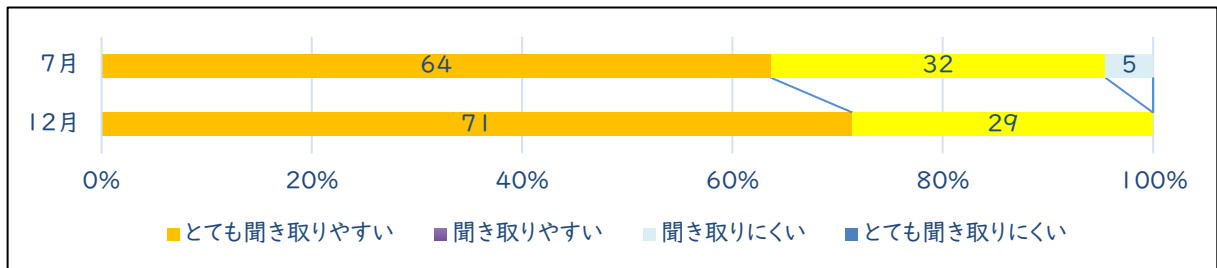
□アンケート方法:①アンケート用紙への記述 ②GoogleForms(タブレット型端末使用)

□アンケート結果(対象授業:生活単元学習)

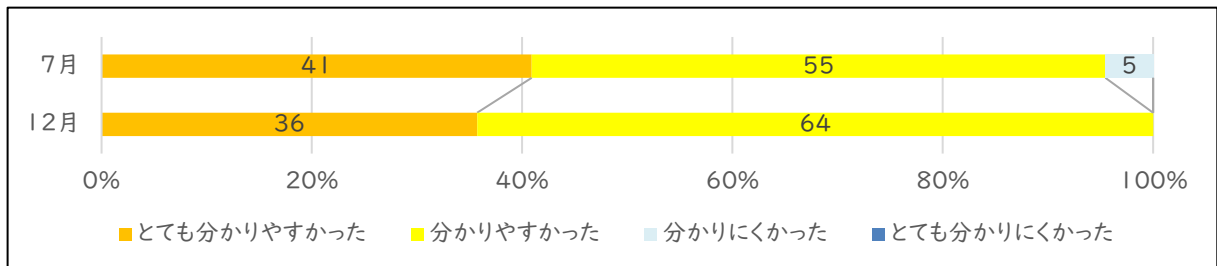
アンケート方法をプリントへの記入から GoogleForms(タブレット型端末を使用)に変更したことで回収率が25ポイント下がりました。このことから、アンケートの実施については、生徒の実態に応じてプリントまたはタブレット型端末と回答方法を選択できるようにする必要があります。

1 授業の進め方について

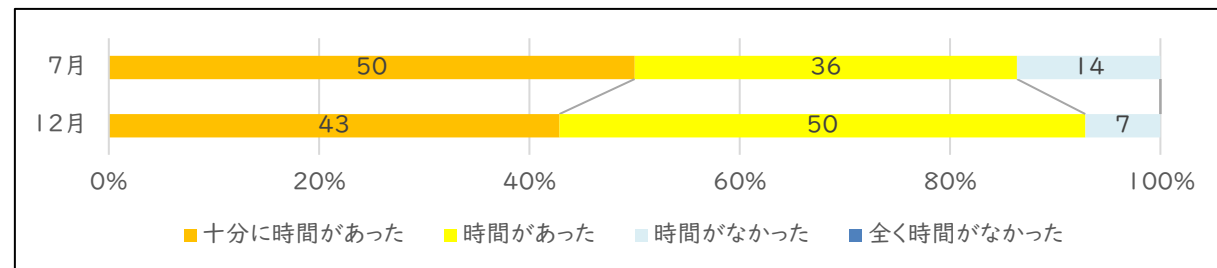
①先生の声の大きさや話し方は聞き取りやすいですか。



②先生の質問や説明、指示は分かりやすかったですか。



③考える時間やプリントを書く時間は十分にありましたか。

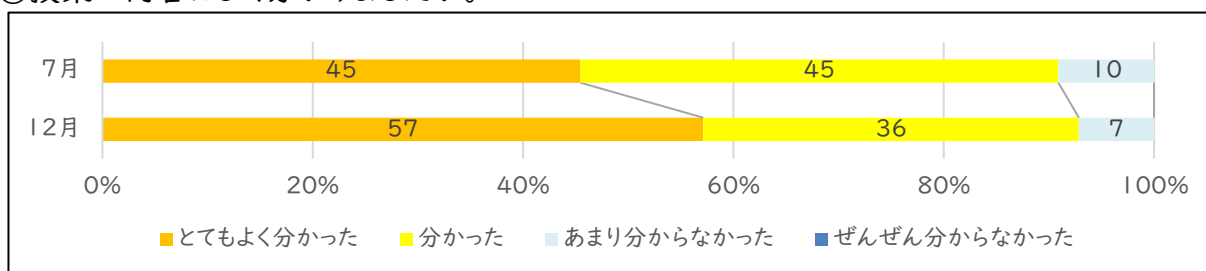


○どの項目も肯定的な回答が7月よりも12月の方が増えています。肯定的な回答が①②については100%、③については93%になっていることから、生徒たちにとって分かりやすく、十分に考える時間のある授業が行われていることが分かります。

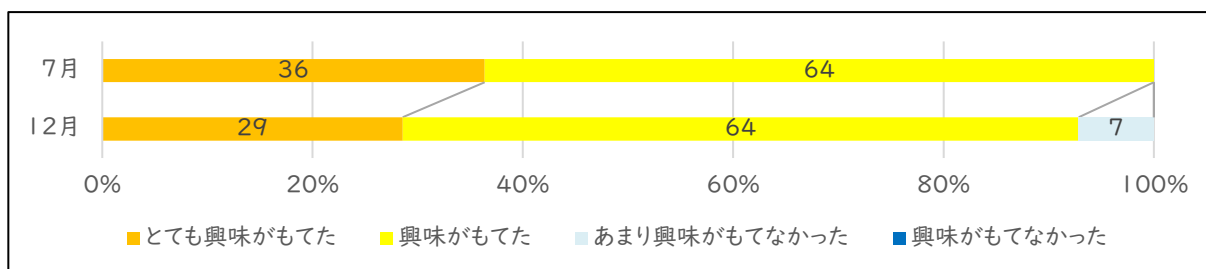
○設問③については、「あまり時間がなかつた」の回答が若干ありますが、前回よりも減っていました。教師が本時で何を学ぶかなど内容の精選をしたり、ICTを活用して書字や考えを整理する時間を十分につくったりした成果だと思えます。

2 授業内容について

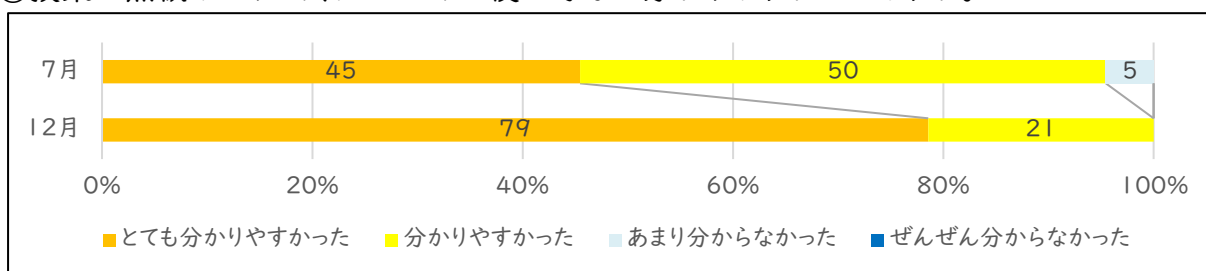
①授業の内容はよく分かりましたか。



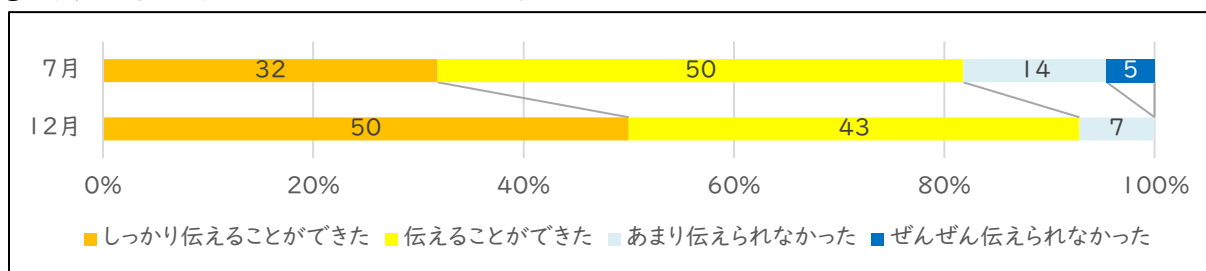
②授業内容に興味をもったり、もっと知りたいと思ったりしましたか。



③授業の黒板やプリント、タブレットの使い方など分かりやすかったですか。



④授業の中や振り返りのときに自分の考えや意見を先生や友達に伝えることができましたか。



○設問①③④は、7月よりも肯定的な回答の割合が増えていました。特に③は肯定的な回答が100%でした。プリント学習だけでなく、タブレット型端末を生徒の実態や学習内容に応じて有効に活用した成果だと思えます。中学部で取り組んだ授業におけるICTの活用方法を他学部でも取り入れていければと思います。

○設問②は、7月よりも肯定的な回答の割合が減りました。生徒たちは興味をもって学習に取り組み、十分に調べ尽くした結果の表れではないかと思えます。

□実施日:①R5年7月 ②R5年12月

□対象生徒:高等部1・2・3年生(1年7名 2年22名 3年11名 計40名)※R5年12月現在

①1年5名 2年20名 3年7名 計32名<回収率:76%>※R5年7月:在籍数42名

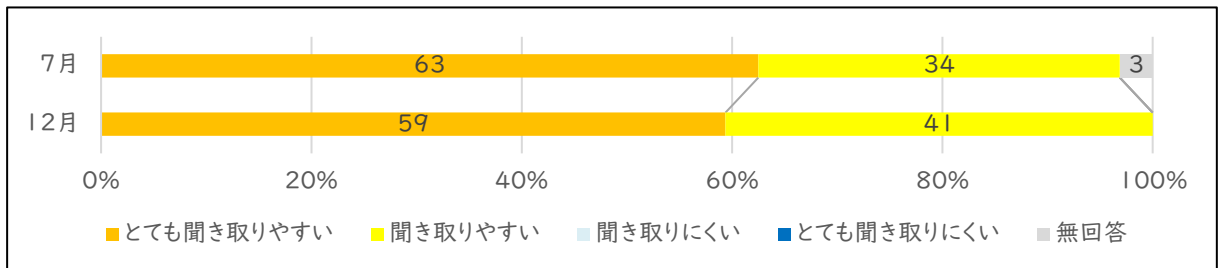
②1年7名 2年21名 3年4名 計32名<回収率:80%>

□アンケート方法:①アンケート用紙への記述 ②GoogleForms(タブレット型端末使用)

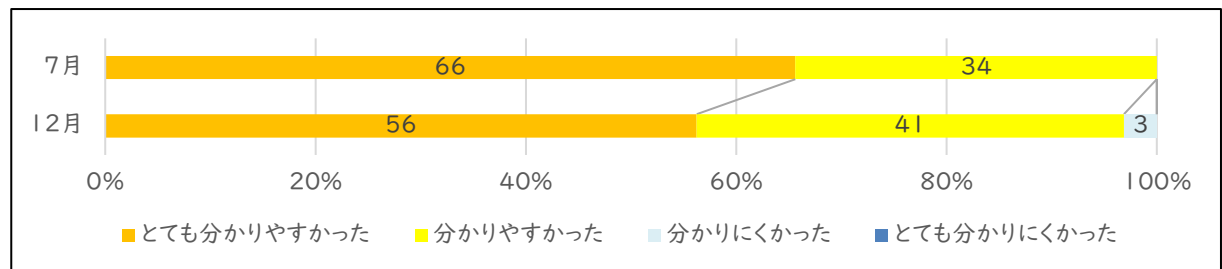
□アンケート結果(対象授業:家庭科)

1 授業の進め方について

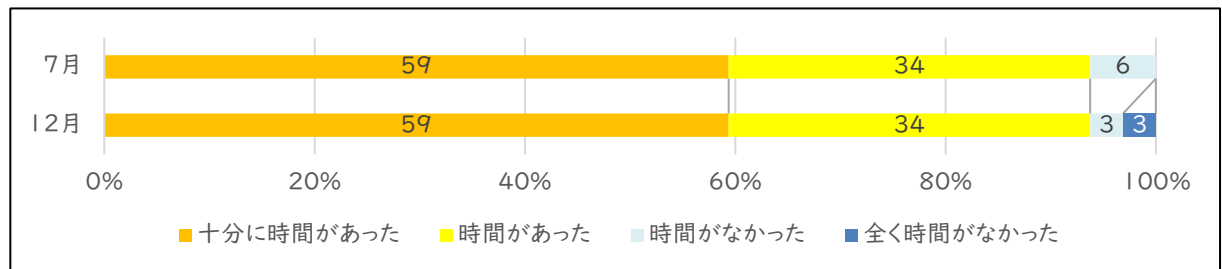
①先生の声の大きさや話し方は聞き取りやすいですか。



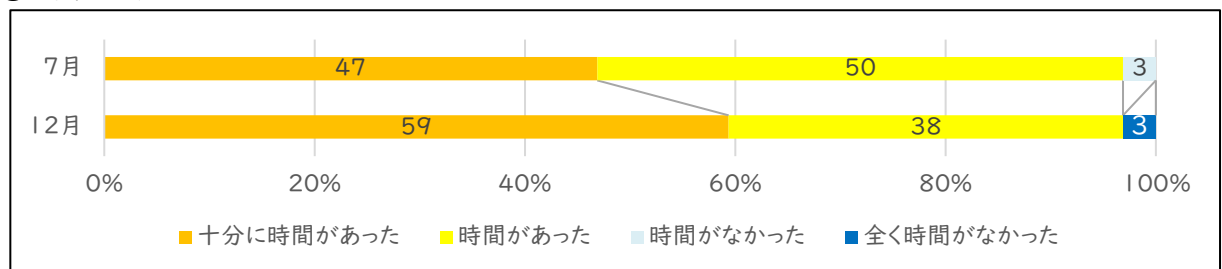
②先生の質問や説明、指示は分かりやすかったですか。



③考える時間や話し合う時間、プリントを書く時間は十分にありましたか。



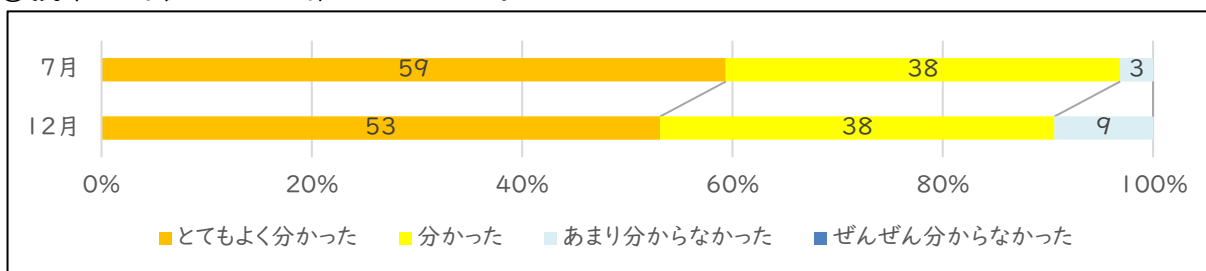
④授業を振り返る時間はありましたか。



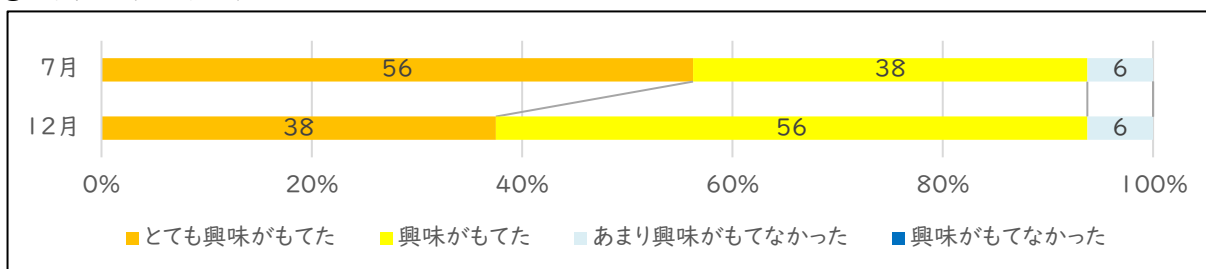
○どの項目も肯定的な回答が多く、7月から引き続き教師が生徒に分かりやすい授業を行っていることが分かります。考える時間や書く時間、振り返る時間を確保するためにも、「学習のゴール」を明確にし、1単位時間の中での学びを精選していくようにするとよいと思います。

2 授業内容について

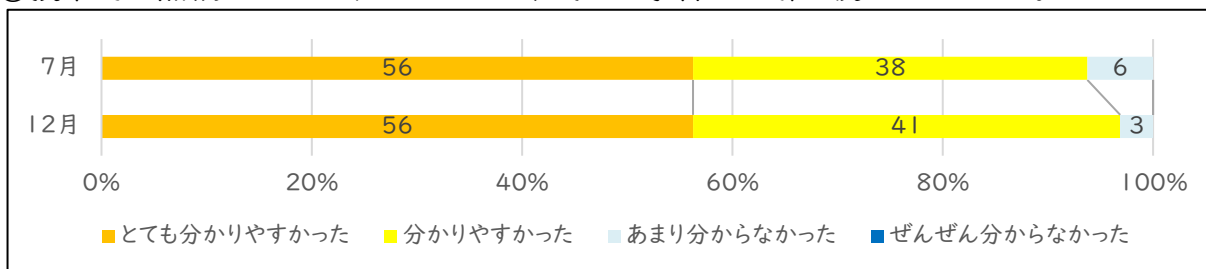
①授業の内容はよく理解できましたか。



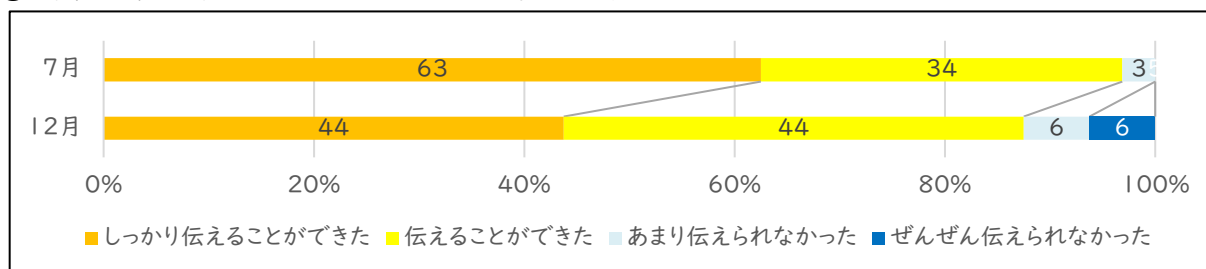
②授業内容に興味をもてましたか。



③授業内の黒板やプリント、タブレットの活用など学習の理解に役立ちましたか。



④授業の中や振り返りのときに自分の考えや意見を伝えることができましたか。



○どの項目でも7月に引き続き、肯定的な回答が多く見られました。

①④否定的な回答が若干増えました。生徒の実態に応じた学習内容を検討したり、振り返りの時間を確保して一人一人が十分に本時に何を学んだのか、実生活にどう生かすのかを考える時間を保障したりする必要があると考えます。

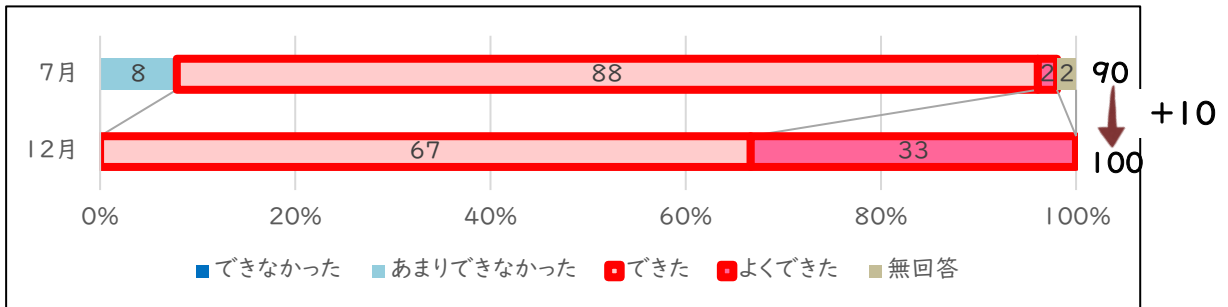
③2学期はタブレット型端末を活用した学習グループが多くありました。タブレット型端末の活用は、視覚的に分かりやすい提示や繰り返し・やり直しができる操作、学んだことの振り返りなどに有効だったのではないかと思います。今後もタブレット型端末を活用するよさ、実際に体験するよさ、プリントで学習するよさなど、それぞれのよさを効果的に活用し、実生活につながる学びを展開していきましょう。

- 回答数: ① 7月 51名 (内訳 小学部 17名 中学部 11名 高等部 23名)
 ② 12月 49名 (内訳 小学部 19名 中学部 10名 高等部 20名)

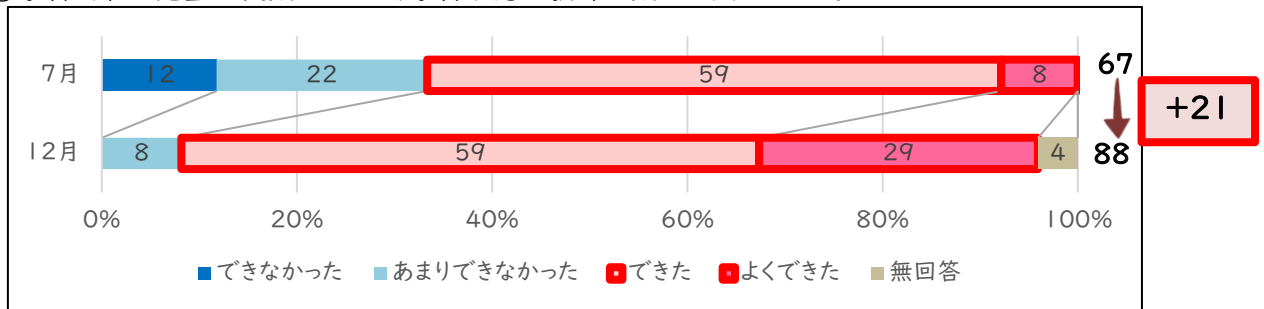
□質問内容 ※7月→12月の「できた」「よくできた」のポイントの増減

【授業準備】

①必要に応じ、ワークシート等の教材・教具を準備している。

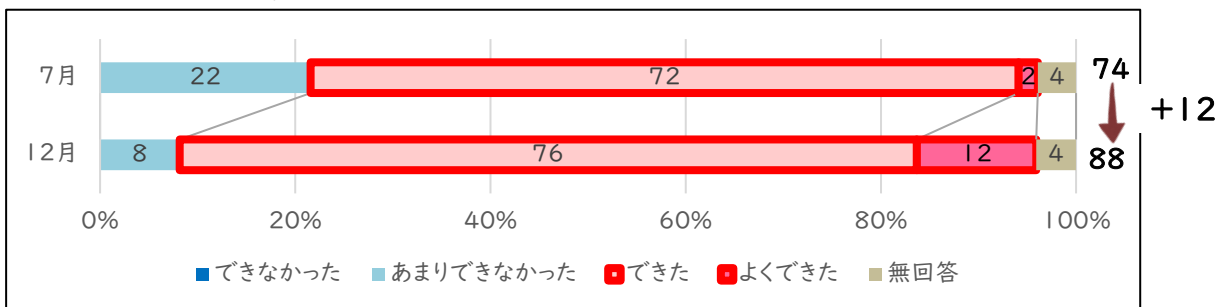


②学習内容や児童生徒数に応じて、学習形態や教師の数を工夫している。

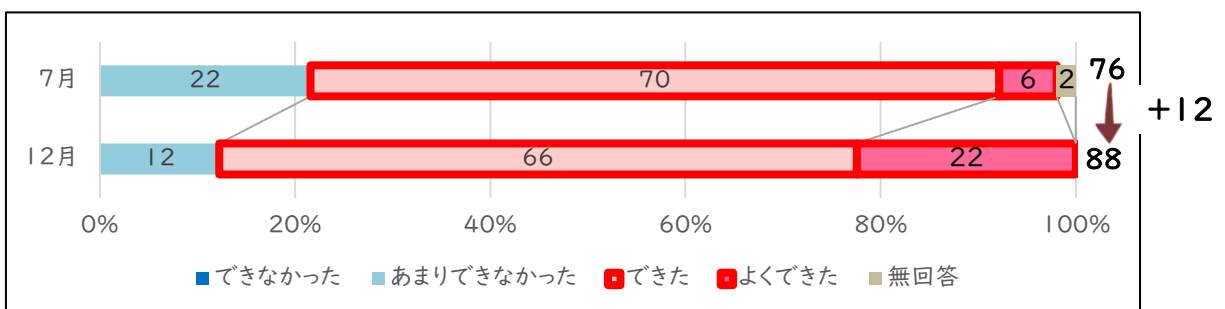


【内容】

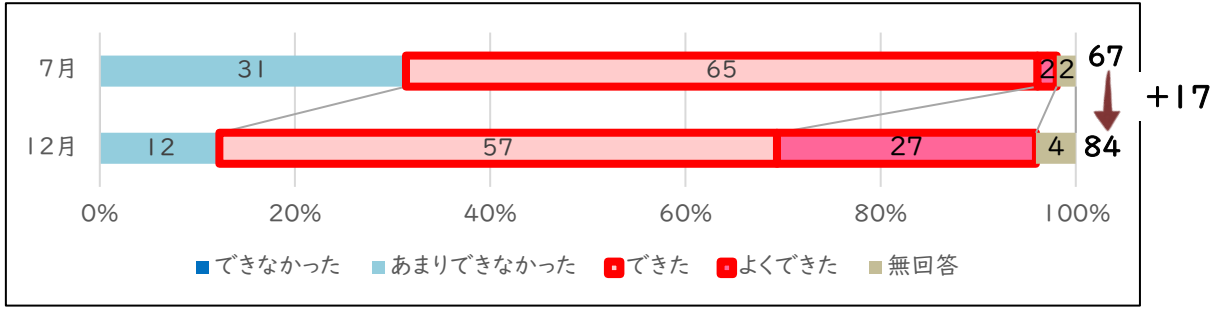
③本時の目標は学習指導要領を踏まえ、単元構成や児童生徒数の実情に照らして設定している。



④多様な学習活動を取り入れている。

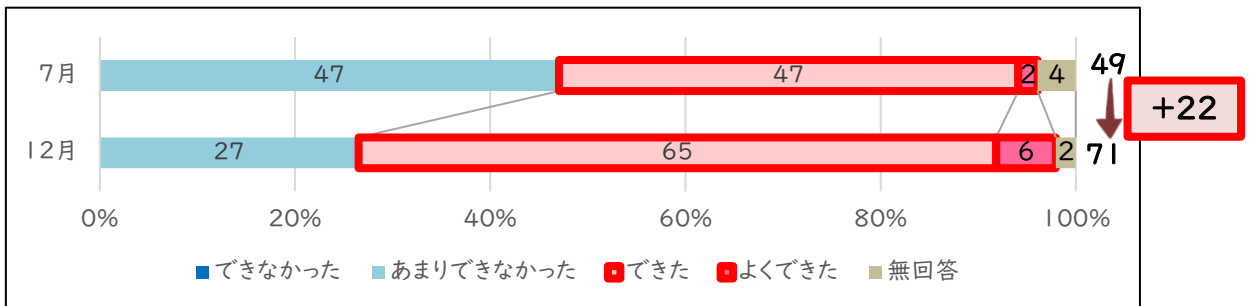


⑤本時のめあて(課題)に対するまとめや振り返りをしている。

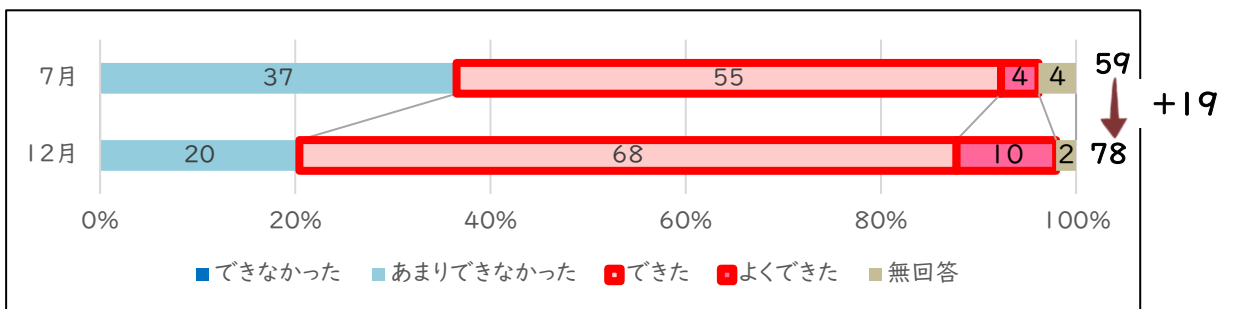


【板書】

⑥授業内容を構造的に表現し、分かりやすく板書している。



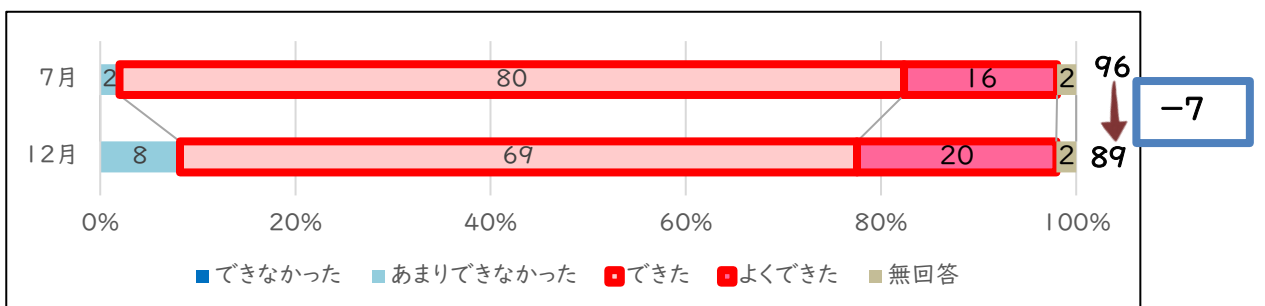
⑦文字の大きさや色等内容に応じて、丁寧に書いている。



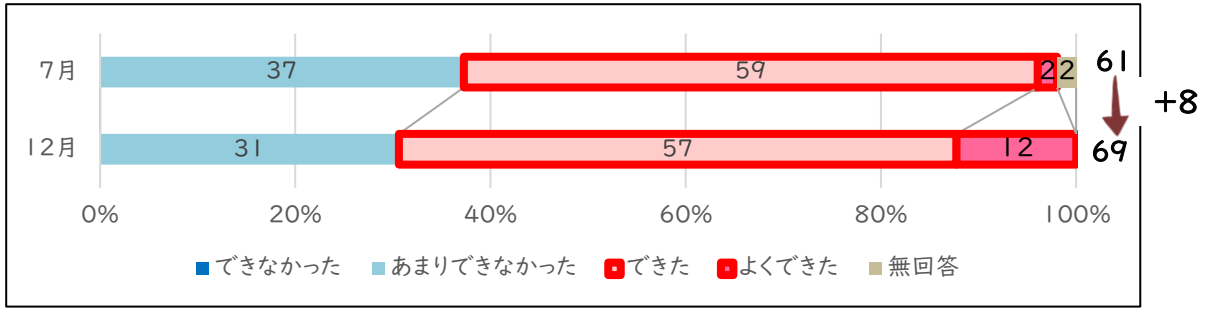
●板書については⑥⑦ともに7月に比べてポイント数は増加している。しかし、全体的に肯定的な意見が7割と課題に感じている職員が多い。「めあて」「課題」「まとめ」「振り返り」の提示とともに、「授業の流れ(児童生徒の思考)が見える板書」を目指したい。

【発問、指示】

⑧児童生徒に聞こえる声で明確に発問や指示をしている。



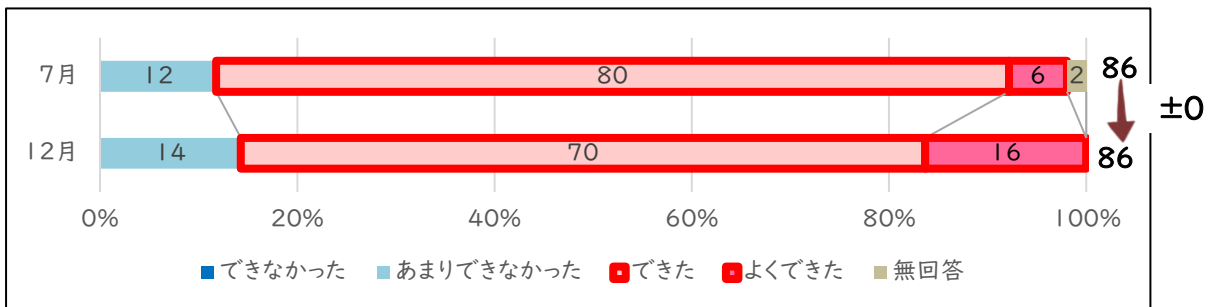
⑨ 児童生徒の様々な考えを引き出したり、思考を深めたりするための発問をしている。



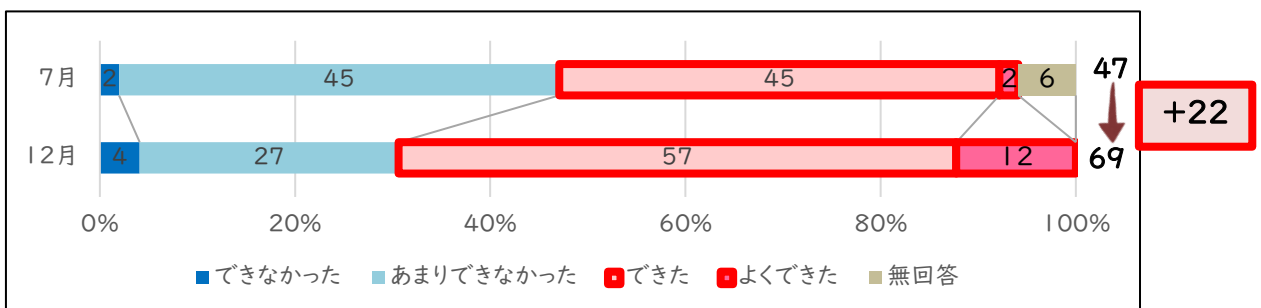
- ⑧は、7月に比べて教職員が意識して取り組んだ結果がポイントの減少になってしまったのではないかと考える。場所や児童生徒の人数に応じた声の大きさなど、引き続き意識して取り組みたい。
- ⑨は、ポイント数は微増であるが、肯定的な回答が7割弱であったことから、授業における発問の大切さや難しさを感じている教師が多くいると思われる。児童生徒が主体的に学びに向かう姿を目指すためにも、本時で「何を学ぶか」を明確にすることで発問が整理されると考える。次年度以降も検討していきたい。

【対応】

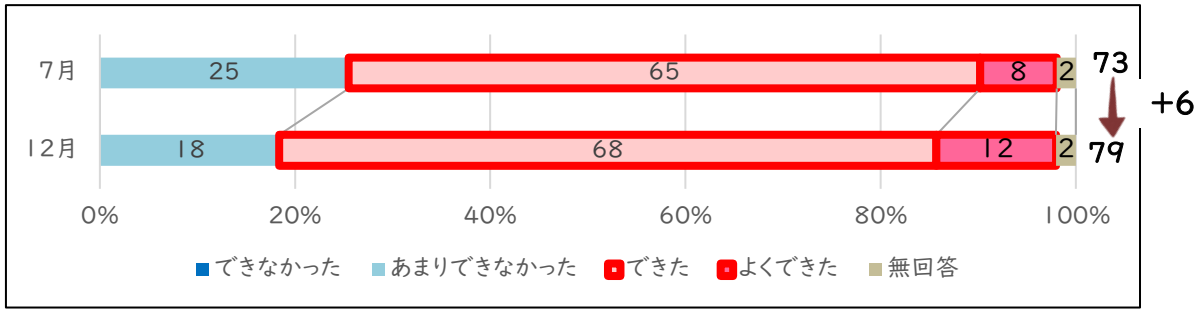
⑩ 児童生徒の質問や意見等を大切にして授業を進めている。



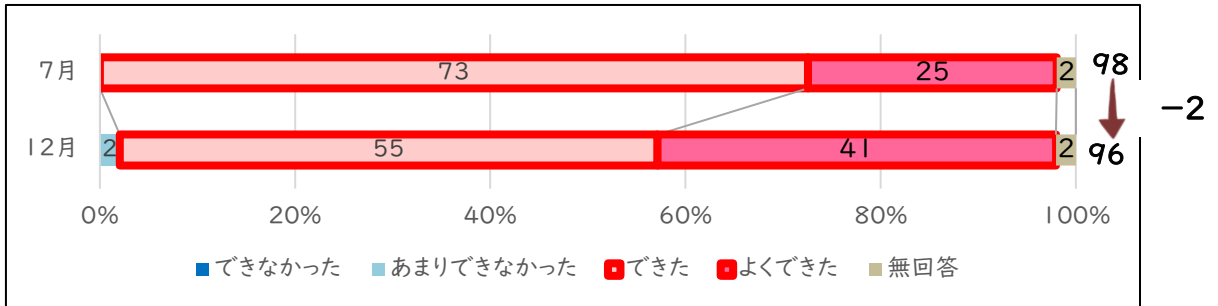
⑪ 専門性の高い質問等にも的確に対応している。



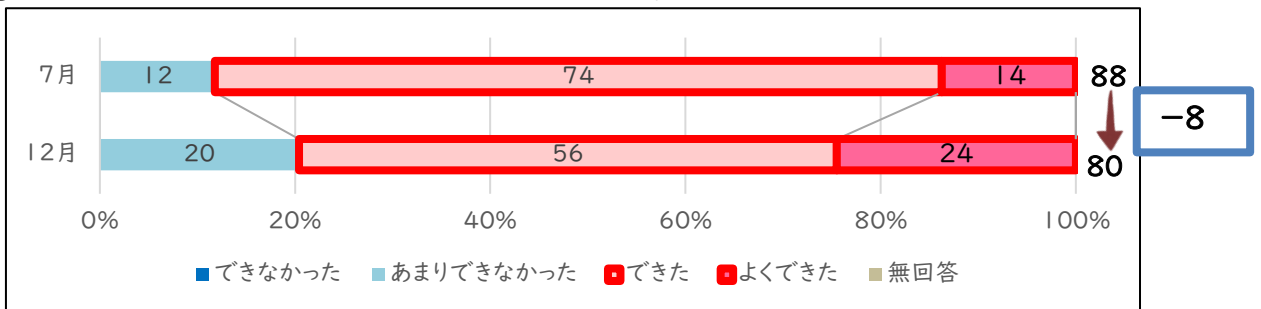
⑫一部の児童生徒に片寄ることなく発表を求め、授業を進めている。



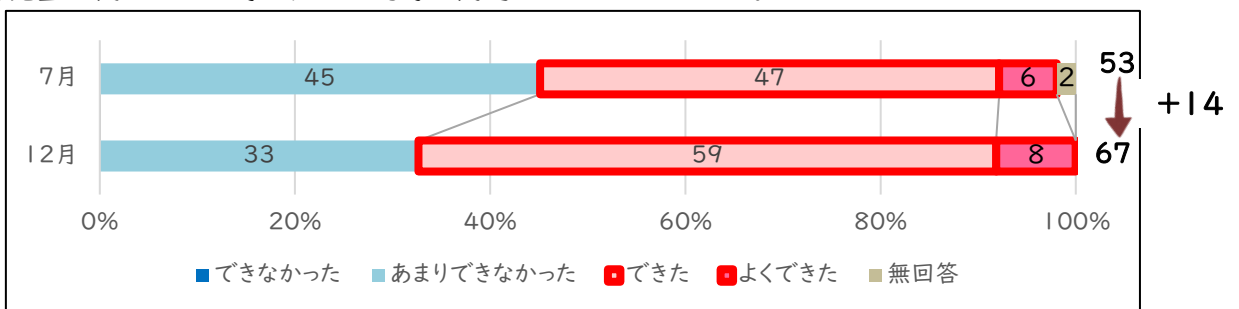
⑬うなずいたり、ほめたりしながら授業を進めている。



⑭学ぶ姿勢や学習ルールについて、毅然とした態度で指導している。



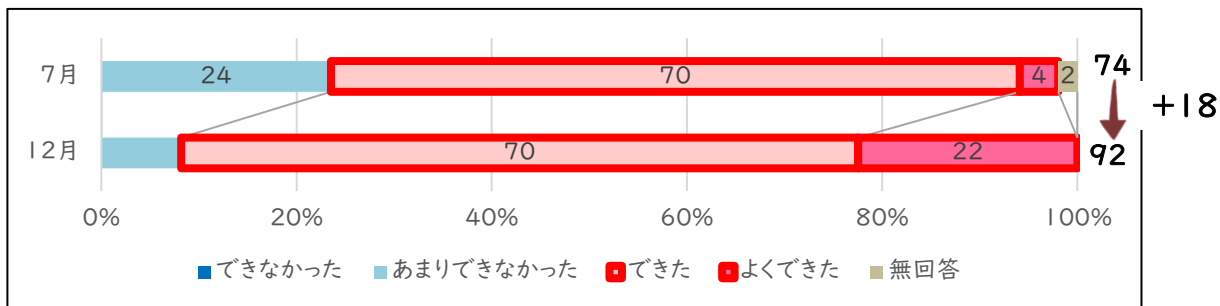
⑮児童生徒のプリント等の記入が思考を促進するものになっている。



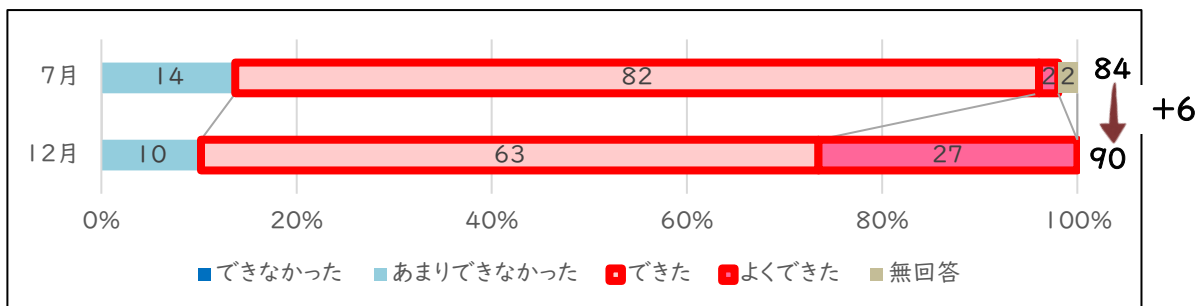
●⑭は、肯定的な回答が微減しているものの、7月に比べて12月の方が「よくできた」と回答した先生方が10ポイント増加している。どの授業でも教師が同じ対応をすることで、児童生徒の学ぶ姿勢もよい方向へ変容すると思われる。

【評価】

⑩ 児童生徒の学習上の成果や課題等を把握している。

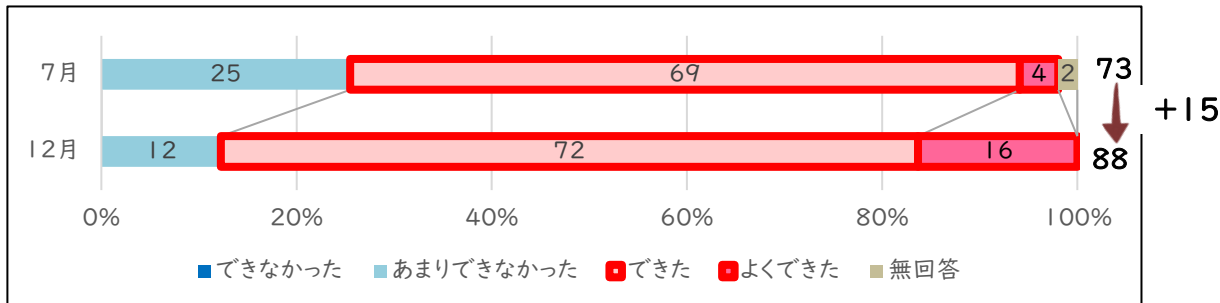


⑪ 授業中の児童生徒の学習状況から必要に応じて指導を工夫している。

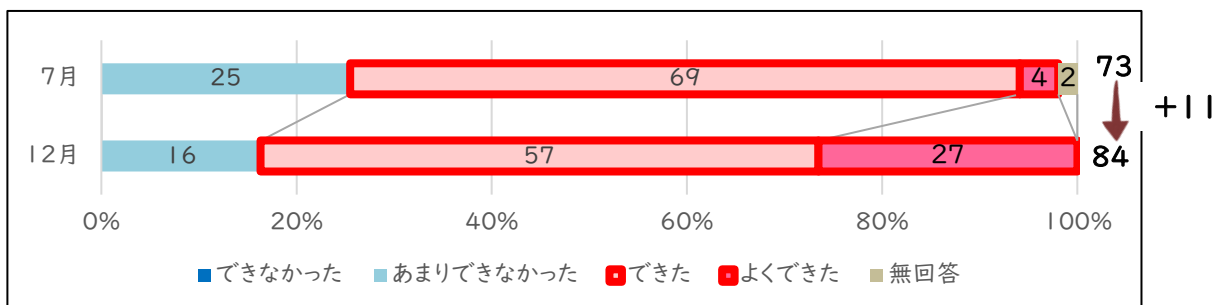


【時間】

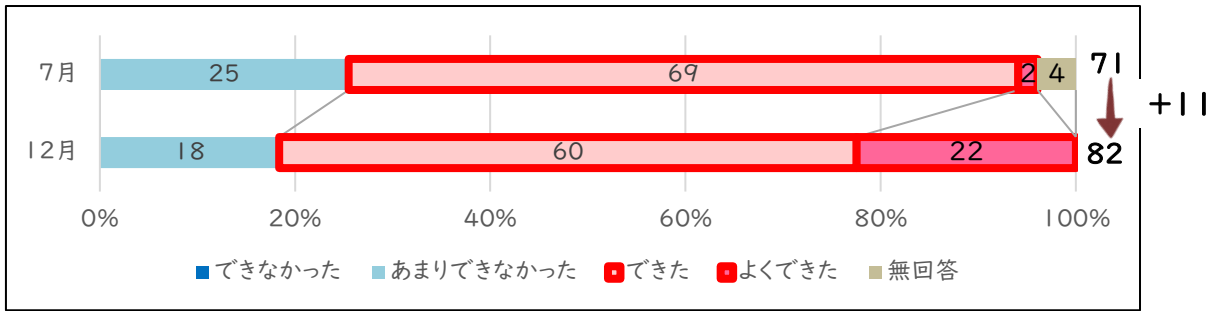
⑫ 児童生徒に発言・質問・活動の時間を適切に確保している。



⑬ 授業の開始時間と終了時間を守っている。

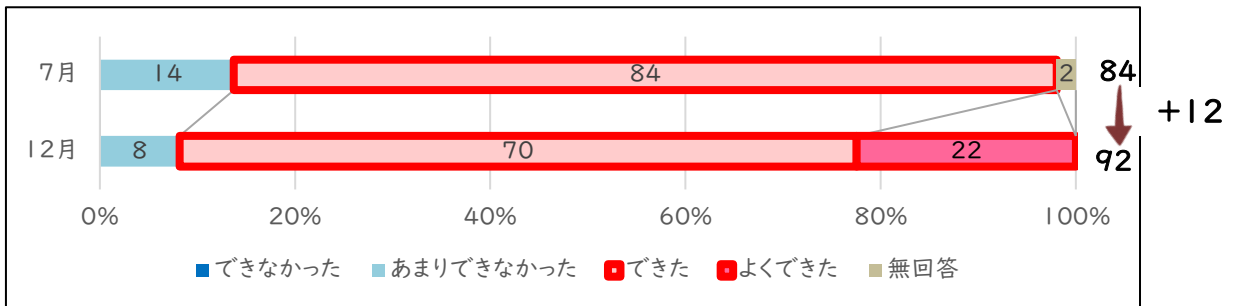


⑳授業時間内に学習のまとめを終えている。

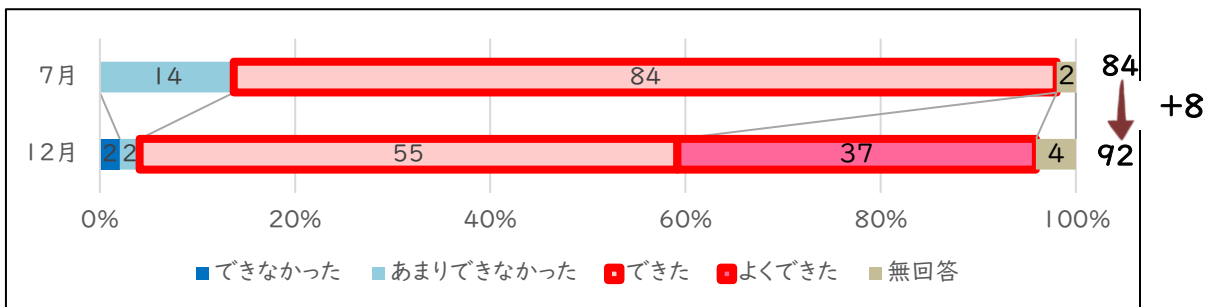


【態度姿勢】

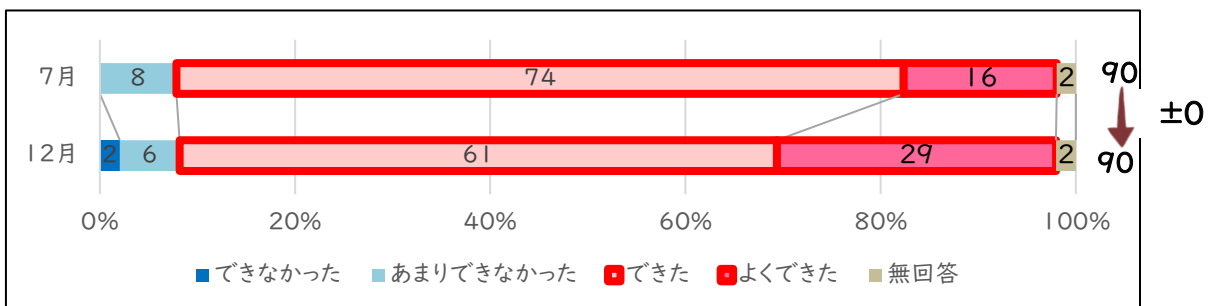
㉑児童生徒の発達の段階に応じた分かりやすい言葉を使っている。



㉒児童生徒の目を見て話している。

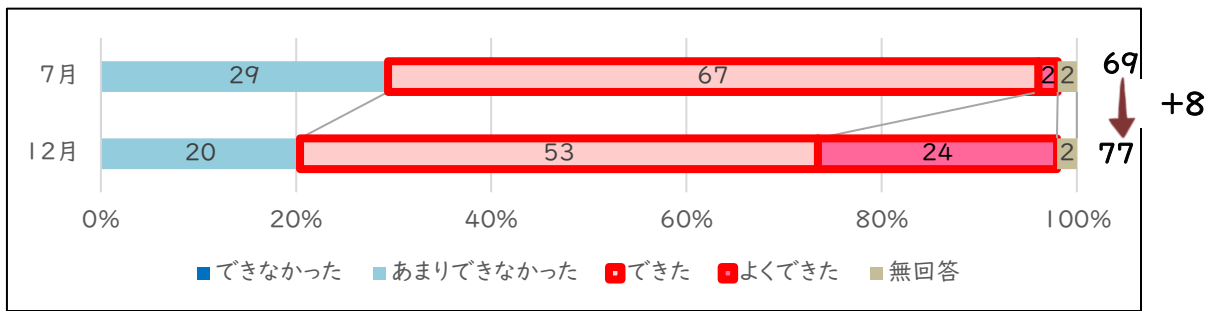


㉓授業内容に適した服装に気を付けている。

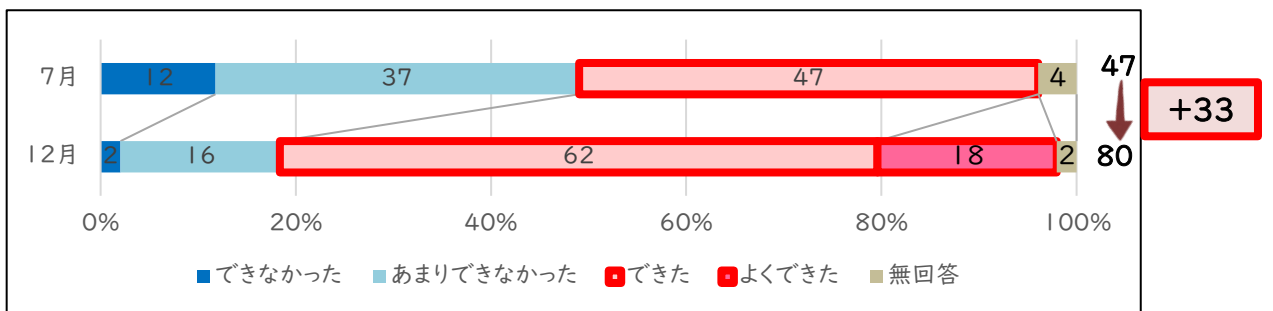


【振り返り】

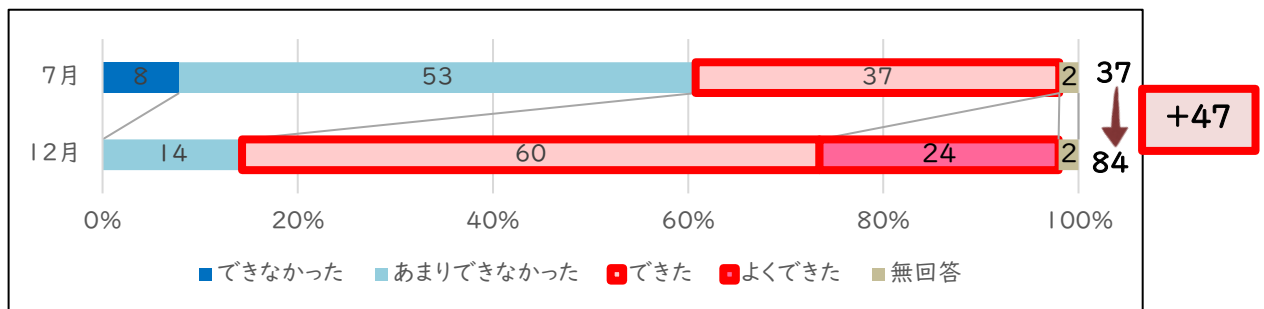
㉔授業の時間内に振り返りの時間を確保している。



㉕授業内容に応じた振り返りの視点を提示している。



㉖児童生徒に応じた振り返りの工夫をしている。



○【振り返り】については、㉕は33ポイント、㉖は47ポイント増加している教師が普段の授業の中で「振り返り」の視点を提示したり、児童生徒に応じた「振り返り」の工夫をしたりした結果がポイントの増加に表れたと感じる。今年度は小・中学部が生活単元学習、高等部が家庭科を研究対象としたが、研究対象以外の授業でも次の学びにつながる「振り返り」をしている様子が見られた。引き続き、取り組んでいければと考える。

令和5年5月に新型コロナウイルスが第5類に移行されました。学校においてはコロナ禍以前の教育活動が戻りつつありましたが、令和6年の元日、北陸地方で大きな地震がありました。地震による被害も大きかったのですが、一部の学校再開や集団避難先での授業の再開、共通テストに臨む受験生のニュースなどが報道されていました。困難な状況にあっても学びを止めない報道に触れ、今は一日も早い復興と被災された方々の安全と御健康を祈るばかりです。

さて、本校では令和3年度から4年度までの2か年にわたり、秋田県教育委員会より「e-AKITA ICT 学び推進事業」のICT活用推進モデル校の委嘱を受け、児童生徒が学びの実感もてる授業づくりを目指し、ICTの効果的な活用に取り組んできました。成果として、児童生徒の学習への興味・関心や目標達成への意欲、期待感を高め、児童生徒自身がめあてを達成するための方法や手段を自己選択できる場面が増えたり、児童生徒自身による表現方法や学習活動の幅を広げたりすることができました。

これらの成果を基に、今年度は研究課題を新たに「課題を発見し、主体的に学ぶ児童生徒の育成～児童生徒の『振り返り』が次の学びにつながる授業を目指して～」と掲げ、授業改善に取り組んできました。

本校においても授業の導入でめあてを提示し、終末で振り返りを行う授業展開がスタンダードになってきましたが、本時のめあてや学習課題に対して「何を学んだか」を明確にする学習活動についてはまだまだ改善点があります。

そこで、全校研修会において「振り返り」の捉えを「学びの成果や実感、学んだことや意欲、問題意識等を生活や次時へつなげるために、学びを振り返ること」と共通理解し、学部授業研究会や全校授業研究会等を重ねてきました。

また、授業研究会では、振り返りの表現について、子どもの気付きや新たな疑問等が子ども自身の言葉で発せられる（表現される）ことや、そのための学びのプロセスの大切さ等について活発な意見交換がなされました。一方で、様々な方法で表現された振り返りを教師がいかにして取り上げ、全体に広げるか、いかにして学びを価値付けていくかという点で課題もあります。

児童生徒が自分で発見した課題や問いに対して明確に目的をもって学ぶ姿を引き出すために、今後も思考活動の充実を図り、子どもたちが課題を発見している姿や主体的に学んでいる姿を具体的にイメージし、複数のルート（手立て）でアプローチできるよう、授業改善に取り組んでいきたいと考えます。

最後になりましたが、本研究を進めるにあたり、全校授業研究会に御参加いただいた県内特別支援学校の皆様からたくさんの御意見を頂戴し、授業づくり、授業改善に生かすことができました。誠にありがとうございました。併せて、本紀要を御高覧いただきました皆様より、忌憚のない御意見・御指導をいただきますようお願い申し上げます。

研究に携わった職員(令和5年度)

校長 阿部 純 一 教頭 高橋 和 恵 教頭 稲川 一 男

事務長 川本 健太郎 教育専門監 菅原 咲希子

(小学部)

高橋 知希子
岸 英子
高山 知子
佐藤 章子(研究部)
若生 友樹
佐藤 深雪
佐々木 麗子
鶴田 美穂
戸澤 寛子
柴田 怜子
高橋 佳奈子
遠藤 千愛美
今 七海
小山 耕大
佐藤 玲奈
古閑 利加子
佐々木 基子(研究部)
辻嶋 真梨子
進藤 由衣
鈴木 圭太
菅原 美奈子
安達 由美子

(中学部)

堅持 夕子
宮本 ゆかり
伊藤 由紀
小番 俊和
土田 優子
佐々木 涼子
佐藤 豪
後藤 ゆり子(研究部)
佐々木 詠吏
丸山 まゆ子
守屋 美(研究部)
高井 哉子
三浦 真紀子
大沼 美和子
小椋 トモ子
柴田 秀幸
高橋 成浩

(高等部)

熊谷 淳 晴
佐藤 恵 恵
朝倉 知司
佐藤 尚人
木村 栄一
谷藤 弘美
小西 ゆり子
池部 和美
水谷 智子
高橋 静香(研究主任)
柴田 豪
小棚 木明子
青木 真知子
菊池 牧子
佐々木 祐
遠藤 奈津子
岩澤 有希子(研究部)
藤平 裕太
佐藤 千尋
鈴木 真澄
高橋 誠
沓澤 直樹
富樫 潤
山本 智栄子
佐々木 美穂子
高橋 典子
室井 真美(研究部)
守屋 充敬
赤坂 千春
中川 浩孝
和賀 典子
井上 由美子
佐藤 昌子

発行年月日：令和6年3月19日

発行所：秋田県立横手支援学校

〒013-0064 横手市赤坂字仁坂 105 番地 1

T E L：0182-33-4166(小・中学部) 0182-33-4167(高等部)

F A X：0182-33-4266(小・中学部) 0182-33-4277(高等部)

E m a i l：yokote-s@akita-pref.ed.jp

ホームページ：<http://www.yokote-s.akita-pref.ed.jp>

